



第50号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090  
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一  
発行人 木村元正

開戦記念日の意義

—あれから六十年—

現在8月15日を終戦記念日として様々な行事が行われ、マスコミも大きくとりあげている。思うに日露戦争における陸軍記念日や海軍記念日は、何も戦争が終った日ではない。戦争の帰趨を決する大捷を博した日である。大捷という意味では正に12月8日は該当するが、戦争そのものが敗戦に終わったので、陸軍記念日や海軍記念日並みに取扱えたいも無理な話である。しかし次のような意味でこの日をもっと大きく取上げたい。

何故開戦に踏切ったのかを考察する機会にしたい。

戦争の原因などという大きな問題をここで取上げようとはおほほめ。戦争この会報が月刊であれば12月号に載せるべきところ季刊のため今回になった。祭過ぎての笛太鼓である。

中我々が毎月八日の大詔奉戴日に奉読した開戦の詔書に、この際もう一度目を通してみよう。

天祐ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戦ヲ宣ス朕力陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ朕カ百僚有司ハ励精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ挙ケテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄与スルハ不願ナル皇祖考不承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ万邦共榮ノ榮ヲ借ニスルハ之亦帝國カ常ニ外交ノ要義ト為ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト對峙シ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國

目次

開戦記念日の意義 ..... 1  
 特殊潜航艇真珠湾攻撃 ..... 4  
 大東亜戦争忠魂顕彰六十年祭 ..... 5  
 12月8日に発起した攻撃の時刻 ..... 6  
 今次大戦の名称は大東亜戦争 ..... 6  
 在米回天探査の旅 ..... 7  
 震洋特攻隊への慰霊句碑建立 ..... 14

第一御婚会解散に因んで ..... 18  
 今期の戦史①海軍落下傘部隊 ..... 20  
 図書紹介 ..... 22  
 忘れ難い人たち/回天⑩ ..... 23  
 異色ある川南護國神社の話 ..... 24  
 開闢岳・高千穂峰を望み感懐 ..... 27  
 沖繩特攻慰霊行案内 ..... 28

政府曩ニ帝國ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪乱シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有余ヲ経タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ残存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ待ミテ兄弟尚未タ牆ニ相聞クヲ悛メス米英兩國ハ残存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ与國ヲ誘ヒ帝國ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ經濟断交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫毛交譲ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ関スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ

帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為斷然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ  
 皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

産経新聞は昨年十二月八日に「ペーシ全紙面を割いて、「真珠湾攻撃から六十年」と題し正論を展開し、開戦の詔書には現代語訳をつけている。立派だと思つても求めたい。

国民精神の盛り上がりを現代にも求めたい。

このことについては一昨年(42号)のものだが、往時の文芸(昭和戦争文学全集)にそのことを偲んでみる。

当時一流の文士の文章を借りる、これがそのときの盛上った国民感情であった。

## 十二月八日の記録

伊藤 整

十二月八日の昼、私は家から出て、電車道へ出る途中で対米英の宣戦布告とハワイ空襲のラジオニュースを聞き、そのラジオの音の洩れる家の前に立ちどまっているうちに、身体の奥底から一挙に自分が新しいものになったような感動を受けた。

日米交渉が難関にぶつかっていることは、数日來の新聞で読んでいた。いざれ避けがたい衝突が来て、日本が太平洋でアメリカと相撃つ日があるだろう、という予測は、私の胸に困難という文字どおりの感じを与えていた。幾度か私は軍当局の、決して国防に不安はないという言葉聞いていた。また日本民族の戦いにおける強靱さを私は深く信じていた。しかし物資と海軍力の量とを誇称する米國を相手に戦うという考えは、重々苦しく私にのしかかっていた。このままで済む筈がない。

戦争資源を絶たれ敵國に公然と援助を与えられて日本が引っ込んでくることはできない。いざれやらねばならぬ戦争だ。それは何時だろう。もう間もないことも思われ、また幾月か將來のこととも思われた。ワシントンでの外

交渉の実相が窺い知るべくもないので、不安は大きかった。すでに知人でお召しに応じたものが幾人もあり、一層危機の切迫したのを私は身にかけていた。

ところが、この日、我海軍航空隊が大挙ハワイに決死的空襲を行ったというニュースを耳にすると同時に、私は急激な感動の中で、妙に静かに、まあこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まったのだ、と安堵の念の湧くものを感じた。この開始された米英相手の戦争に、予想のような重々苦しさはちっとも感じられなかった。方向をはっきりと与えられた喜びと、弾むような身の軽さとがあつて、不思議であつた。

(中略)

私は歩きながら、対英米の宣戦布告の御詔勅が發布されましたという言葉、ラジオの洩れる家の前で立ち聞きし、その文言はよく理解されぬながら、このみことのりのままに身を処することしか今は何も無い、と思うのであつた。軍歌の放送されるのを背後に聞きながら、私はこの記念すべき日の帝都を見ておかねばならぬ、と、やっと、自分の心ひかれる方向を見定めた。何も知らずに家にいる妻や子を思い浮かべたが、いつまでも私がお前たちと一緒にいるとは思ふな、と言ってみ、特

に今家に帰らない必要があるような気になるのであつた。このようにして家族が私に置き去られる日のことを、私ははつきりと感じた。自分の生來の冷淡さが、そういうとき自分を救うことになるだろうか、それとも反対に急に自分が情に溺れる人間になるだろうか、などと考えた。

以前風呂屋であつたのが、廃業して、何かブリキ板を型にでもはめる工場になったのが通りへ出る角にあつた。そこへ来るまで、私は国防服を着た中学生の外誰にも逢わなかつた。その辺が原っぱで、家はあちこちに四、五軒づつしか無いからでもあつた。その工場

はたえず機械ががたと鳴り、建物全体が身ぶるいしているような騒がしい場所であつたが、そこまで来ると、堀のそばにトラックをおいて四、五人の男たちが荷物を積み込んでいた。私は、今日、この大いなる日に彼等はどんな顔をし、どんなことを話し合っているか、と不思議なものを確かめるような気持ちで近づいた。

男たちは粗末な戦闘帽をかぶつたのや、飴色のコールドの労働服を着たのや、国防色の服を着たのやさまざまであつたが、「そいつをうんと押してくれよ」などと言って、極当たり前に声高に話しながら働いていた。彼らのそ



の様子は、一瞬信することのできない情景として私の目に映った。だがそれは、戦争はもう知っているのだが、まあ、仕事は仕事として片付けなくちゃ、と言っているようでもあった。そうだ、私は今やっとなつた。この笑い顔は、

ものがさず十分に味わっておかねば、とりかえしがつかないと思った。まだ自分の感受性の届かない今の生きる価値がもっとあって、それを早く自分のものにしなければ、とあせる思いもあった。

戦争のことではない。私は瞬間にそれをさとり、今日こういう一人笑いの出来る人間がいるということにびっくりした。その笑いは、何か非常にうまく抄った個人的なことがあって、それを思い出すと頬がゆるむ、といったさまだ。私は彼にとっては、その笑いを見られてもいい無縁の存在だったらしい。だが今日は無縁ではないじゃないか、と私は傷つけられたような思いをした。

私はお濠ばたを下って三宅坂の方へ来た。三宅坂の辺は、お濠のそばに人道がなかったのが、ひろげられて新しく出来ていたが、そこは舗装ができていず、なまの土が、弾力があつた。歩いていて一刻一刻の時間が、しずくが落ちるように、はつきりと感じられた。文学はどうなっているか、自分の仕事はどうなるか、ということ、この頃ずつとそうであつたように長い予測を立てて考えることはできなかった。

電車道を越えてお濠ばたに出た。この日はうすく霞のかかった全く風の無い晴れた日であつたが、お濠ばたの景色は何とも言えず美しかった。芝草の斜面に植えられた松と石垣とがうすうすと霞にぼかされ、音も立てずに鳥が下の水面で飛んだり、浮いたりしている。その向こう、濠の水面のかなたに日比谷、有楽町、京橋方面の建物が夢のようにぼんやりと浮かんでいて。その美しさに私は恍惚となつた。これがこの日においての日本の首都東京だ、と思つた。自分がこの上もなく幸福に感じられ、この幸福感の実体を、一刻

私はそういう文学の理論によつて文学を考へることが次第に不可能になつて来たのを、大分前から自覚していた。人間感動の素朴な根本まで自分の創作意識を洗い出すことが、近年の私に与えられていた唯一の文学上の目標であつた。

私は歩きながら、自分のその考えの延長の上にいるの新しい感銘をおいてみた。そして今後自分が文学者として仕事をして行くのは、国民として何を

喜び、何を憂うかを感動の根源とするのである。外のことはそれに従つてまかせてゆけばよい、と思つた。

私は桜田門から二重橋の方へ入つた。あちこちに参拝する人が佇んだり、坐つたりしている中を、向側からカーキ色の服を着た中学生らしい一団が引率されて縦隊をなして進んで来た。みんな一人一人が若々しく、きつとした顔を、身体をまっすぐにしているのが、

圧倒的に私の心に応えた。一致した集団の精神の純潔さは、その人数だけに拡大された感動の量でもって私にのしかかり、私は涙ぐむのであつた。この一人一人の中学生が日本の臣民であるように、私もまた単純な一個の臣民であります、私はそう自分に言うように中学生たちの横隊になつた列のあとから宮城を拜した。

私は広い宮城前の横断道路を日比谷公園側に抜け、電車道に添つて有楽町の方へ向かった。日比谷の交叉点を渡ると、バスの停留場のそばに、洋服を着た男たちが十人ほど、ラグビーでもやっているようにかたまつて揉み合っている。私もその中に首を突っ込んだ。

新聞売子はその中に蹲つて、手にアルミ貨を一杯のせたまま、どうしていいか分らずにうろろろしている。私は各新聞を一枚ずつ抜いて、「いくらだ、

いくらだ」と突きつけても、売子はあちこちと首をまわしているばかりで、応えてくれない。私はその男が仏さまのようにひろげている掌の上に十錢玉を二つほど落としてその群からやっともがき抜けた。

私は日本劇場の地下室を思い出し、新聞をかかえて歩いて行つた。劇場の扉口には案内の女の子が二人立って何か話していたが、入る客はほとんど無いようであつた。私は地下室に下りた。そこではラジオが軍歌を奏しており、沢山の男たちが新聞をひろげていた。私の眼は新聞の大きな活字の上をあちこちと走り、改めて興奮が湧きあがった。私は体中ががくがくして一つ一つの字をちゃんと追いつながら読むにたえないのであつた。



宮城前に戦勝を祈る老婆親子

### 特殊潜航艇真珠湾攻撃

十二月八日の真珠湾航空攻撃に呼応して、行はれた特殊潜航艇による攻撃は、収容の見込みありと考えられて実行されたので、特別攻撃隊と呼ばれていたが、戦争末期の特攻とは運用上の思想は異なっていた。しかし現在我々はこれも特攻の範疇に含めている。

我が協会の前身である特攻慰霊顕彰会が出した「特別攻撃隊」の関係個所を抜粋してみる。

#### 第一次特別攻撃隊

開戦時の第六艦隊司令長官清水光美中将は「日露戦争のときは決死隊とか閉塞隊という名も使われたが、特殊潜航艇の場合は連合艦隊司令長官も慎重検討の結果成功の算あり収容の方策もまた講じ得ると認めて志願者の熱意を入れたのだからということで、決死等という言葉は避け特別攻撃隊と称することに決った」と回顧している。後の終戦間近の特攻隊とは全く別のものである。

ハワイ作戦に甲標的の参加が決まったが、問題は甲標的を目的地まで運搬する母潜水艦の改造工事である。12月8日開戦とすれば訓練及びハワイ周辺

進出のため約一カ月を要する。11月10日頃迄に五隻の潜水艦の甲標的搭載改造工事及び発進テストを完成しなければならぬ。10月19日改造訓令が出され、その後は文字通り昼夜兼行、乗員、工廠関係者の懸命の努力により、ぎりぎりの11月18日特型格納筒を搭載した潜水部隊は安芸灘からひそかにハワイに向け出港した。

その作戦計画の概要は次のとおりであった。

- 一、編成
- 指揮官 佐々木半九大佐

(第三潜水隊司令)

潜水艦名 艦長 特別格納筒

伊16	山田 薫	中佐	艇長	横山正治	中尉
伊18	大谷清教	中佐	艇長	上田 定	二曹
伊20	山田 隆	中佐	艇長	古野繁実	中尉
伊22	揚田清猪	中佐	艇長	横山薫範	一曹
伊24	花房博志	中佐	艇長	片山義雄	二曹
			艇付	岩佐直治	大尉
			艇付	佐々木啓	一曹
			艇付	酒巻和男	少尉
			艇付	稲垣 清	二曹

指揮官付(予備艇長) 松尾敬宇中尉

各艦に格納筒整備の為め下上官一名配乗

二、特別攻撃隊は11月18日夜亀ヶ首発、途中散開進撃し、ミッドウェーの六〇

〇渾圏から昼間潜航夜間浮上進撃(速力一四節)とする。

三、X-二日日後真珠湾の一〇〇渾圏に達し、格納筒の最後の整備を行ないX-一日一三〇〇(現地の日没後)真珠湾口の一〇渾圏を通過し湾口から約10渾の地点において湾口確認後格納筒を発進する。格納筒は伊16、伊20、伊24、伊18、伊22潜の順に三〇分間隔で湾口を通過する。その最後を日出一時間前とする。

四、筒は侵入後海底に沈座待機し、第一次空襲後攻撃に転ずる。艇長の判断により攻撃は日沈後でもよい、攻撃終了後フォード島を左に見つつ湾内を一巡して脱出する。

五、母潜水艦は日没後ラナイ島西方七渾を中心として浮上待機、第一日収容不能の場合は翌日伊16、伊20はラナイ島西方、他の三隻は同島南方一〇渾附近に配備し格納筒搭乗員の収容に努める。

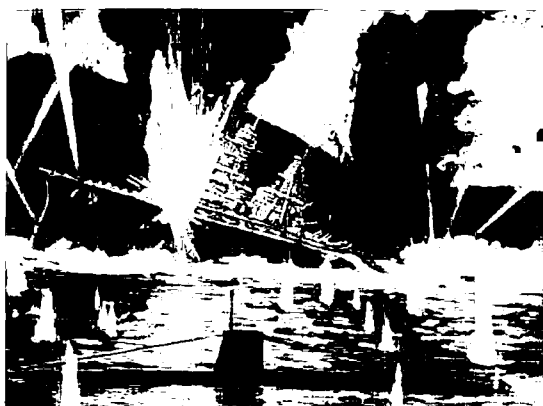
途中太平洋のうねりの中で格納筒の整備に苦勞を重ね12月7日夜予定海域に到着次の通り発進した。

母艦	時刻	格納筒	真珠湾口から距離(渾)	備考
伊16	〇〇四二	槽山艇	二二度七	
伊22	〇二六	岩佐艇	一七度九	
伊18	〇二五	古野艇	一五度二・六	

伊20 〇二五七 広尾艇 一五度 五・三  
伊24 〇三三三 酒巻艇 二〇度 一〇・五 港外に座礁  
米側資料を主に日本側資料とを総合すると、酒巻艇を除く四艇はそれぞれ米艦艇に攻撃を敢行したが岩佐艇は港内で、横山艇はトラトラの奇襲成功電を伊16に打電後同じ港内で、広尾艇と古野艇のうち一隻は港口で、他の一隻は港外で撃沈された。酒巻艇はジャイロ故障のため港内に入り得ず座礁沈没、稲垣兵曹は戦死、酒巻少尉は人事不省のまま捕虜となった。

#### 特潜攻撃の図

松本武仁画



## 大東亜戦争忠魂顕彰六十年祭

我が協会の相談役である前国士館大  
学教授の金城和彦氏を代表とする「大  
東亜戦争忠魂顕彰会」では、毎年12月  
8日に靖国神社で祭典を行っている。  
このことは既に何度か会報で紹介した  
が、本年も約三百人許り参集して行わ  
れた。この行事で特筆すべきは大学生  
が多勢参加することである。そして祭  
文を奏上するのは、いつも大学生であ  
る。今年も同様だった。

## 祭文

本日、ここ靖国の御社におきまして、  
「大東亜戦争忠魂顕彰六十年祭」を執  
り行いますにあたり、参列者を代表い  
たしまして、謹んで御霊の御前に祭文  
を奏上申し上げます。

六十年前の今日の日、日本は欧  
米列強諸国の支配する奪い合いの世界  
に一人立ち向かい、その後、ある光を  
遺して、敗れました。思いおこせばこ  
の数百年、奪うものが奪われるものを  
支配する力学が罷り通っていた時代で  
ありました。そのような世を悲しまれ、

四方の海みなはらからと思ふ世に  
など波風のたちさわぐらむ

そう明治大帝がお詠みになられたことが

御座いました。その大御心  
を一心に引き継がれようと  
されました昭和天皇を戴い

て、わが先達はこの百年の激動を駆け  
抜け、そしてついに歴史の流れをかえた  
のでありますが、欧米の世界制覇が進  
行するこの時代、我が国は自国のみな  
らぬ亜細亜の独立と安定を守る為、日  
清戦争では大韓帝国の独立を確保し、  
日露戦争においては満州と朝鮮半島を  
狙う世界最強国ロシアの侵略の魔の手  
を排撃しました。第一次世界大戦の幕  
を閉じたパリ講和会議においては、先  
人はこの時代を支配していたいかなる列  
強諸国も考えていなかったある提言を、  
堂々と行ないました。大國列強の集う

この国際会議において、世にも人にも  
先駆けて我が国は、隷従と酷使を強制  
する列強国を前に人種差別の廃絶を訴  
えたのであります。神武建国の御代よ  
り今に至るまで、先達は天皇陛下と心  
を一にして、この八紘一宇の精神を顕  
そうとされてきました。しかし、我が国  
のこの存在は植民地を縛り上げること  
により権勢と富を貪ってきた列強諸国  
を揺さぶることとなり、失うことの不安  
とそれ以上の憎悪とに苛まれた欧米諸  
國は、オレンジ計画に始まる対日侵略  
戦争を立案し、強行的な圧力と挑発を  
繰り返すようになったのであります。

手始めにみますれば、大正十年のワ  
シントン会議で、日英同盟は、当事者  
ではないアメリカにより破棄せられると  
ころとなり、また、移民の歓迎を国是  
とするはずのアメリカは、日本人移民の

みを締め出す排日移民法を、その感情  
の赴くままに制定し、アメリカに帰化し  
ていた日本人の国籍まで奪いました。  
この締め付けの果てに、我が国と欧米  
列強との関係は、悪化の一途をたどる  
こととなりましたが、ひたすらに平和を  
願われます昭和天皇の大御心に導かれ  
まして、我が国はあくまで外交にもとづ  
く時局の打開に臨みました。しかし、  
アメリカがそれまでの日米交渉の経過を  
一切無視するハル・ノートをつきつける  
に至って、神代より連なるこの国の生  
命の断絶を予感した我が国は、昭和十  
六年十二月八日、ついに、米英との戦  
端をやむなく開いたのであります。

トラ・トラ・トラの奇襲成功で幕を  
開けたこの大東亜戦争において、我が  
先達は、二千六百年もの連なりをなし  
ているその悠久を守るため、また列強  
による侵略の苦痛より喘ぐ東亜の同胞  
を解放したい思いに胸を熱くして、陸  
海に空に、そして本土である沖縄に、  
力戦奮闘をたび重ね、一つとしりなが  
らもその尊き命を、この悠久に捧げら  
れたのであります。守るべきを守り抜

いたこの奮戦を経て、我が国は国民  
(くにたみ)の身を深くお愛いになら  
せられました昭和天皇の御聖断を畏く  
も奉戴するをもちまして、この御戦を  
閉じることとなりました。

日露戦争以来、列強諸国に抑圧され  
ていたアジア・アフリカの諸民族は、  
同じ有色人種である日本人が、白人列  
強諸国に毅然と立ち向かっていったそ  
の姿に感動し、奮い立ちました。此の  
度の戦に於いては、「大東亜の天地が  
呼んでいる」、そのように強烈な使命  
感を母親に書き遺し、「元気で逝きま  
す」と敵艦に突入された学徒もおられ  
ました。我が国は敗れましたが、  
御霊等が貫き通されたその信念は、抑  
圧されていた世界の民族に独立の勇氣  
をもたらし、コロンブスが彼の大陸を  
発見してより四百年、決して変わるこ  
とのなかった白人支配の歴史の流れを

かえたのであります。タイ王国のクク  
リット・ブラモート元首相は、母体を  
そこなつた日本というお母さんのおか  
げで、今のアジアに独立があることを  
詩に詠まれました。そしてわたくしは、  
身を挺して人類解放の光をもたらした  
この御霊のお姿をお偲びし、深い信頼  
とそして愛情を、おぼえました。世界  
の有色人種を抑圧から解放する先駆け  
となりました十二月八日のこの日を、

守るべきを守り抜

私達が忘れることはありません。

死を目前にして究極の奮戦を尽くしたのち、「後に続くを信ず」と、私達の幸せをも願って先人は最期の瞬間に立ち向かって逝かれました。その思いのうえに築かれたこの平和と繁栄の時代に、生を享けることができましたことに幸せを感じるわたくしは、この宮居に鎮まります英霊に、皆様になりかわって深く感謝を申し上げます。

一時を今に移しまして本年の十二月一日、誠に嬉しくも、高光ります皇孫殿下がご誕生あそばされました。御結婚より八年の月日を経た本年は、生涯国民に安寧の祈りを捧げられました昭和天皇が御誕生あそばされてより百年目の年でもありました。ここに、なんらかの御導きがあったのかもしれない。陰鬱なる闇の呪縛が、一挙に解放されるほどの喜びに、この国は包みこまれました。かえりみるに我が先人は、古より今に、天皇陛下と一体になってこの国を築きあげて参りました。人間、白らが大切に思うものを、時としては生命をかけても守らねばならないことを、私達に身をもって示されました御霊を鑑とし、今ここに御生まれになられました新たな御光(みびかり)をお守りし、断絶ではない二千六百年の

連続のうえに先人が築いてこられた、この美しい日本を守り抜いていくことを御誓い申し上げます。

靖国に鎮まり坐します二百五十万の御霊よ、願わくば、天翔けりつつ、國翔けりつつ、我々の歩みゆく道を照らし給わんことを、参列者一同心より御願い申し上げます、わたくしの祭文とさせていただきます。

平成十三年 十二月八日

青山学院大学国際政治経済学部二年 萩原 良和



12月8日に発起した攻撃の時刻

何れも日本時間

○海軍機動部隊の真珠湾攻撃

○三二〇空襲開始

○第25軍マレー東岸に上陸

○二一五佯美支隊コタバル上陸

○四一二5D主力シンゴラ上陸

○GD先頭部隊〇七〇タイ国境突破

○第23軍〇八〇九竜半島啓徳飛行場に航空攻撃

○八〇〇38D深川東側で国境突破

○南部台湾に展開していた陸軍第4飛行団は〇九三〇頃ルソン島の飛行場及び兵営を攻撃、海軍航空部隊は濃霧の為遅れて午後攻撃

今次大戦の正式名称は

「大東亜戦争」

いまだ東京裁判の呪縛から脱し切れぬ政党と政党人共

開戦の四日後、昭和16年12月12日、政府は閣議に於て「今次対米英戦争ヲ支那事変モ含メテ大東亜戦争ト呼称ス」と決定した。従つてこの名称には法的根拠があり、その後の政府に於て取消さない限り、この決定は存続している。敗戦後GHQは12月15日、日本政府

更に驚いたことには、一昨年のことだが野呂田衆議院予算委員長が、2月18日ある場所の講演で、「大東亜戦争で植民地主義が終り、日本のおかげで独立できたという国の首魁も沢山いる」と言ったことを根にもって、野党は21日、予算委員長解任決議案を出した。解任決議案の提案理由はそれだけではないが、大東亜戦争云々と言つたことが理由の一つになっているとは、恐れ入った。かつてのGHQの言い分が、ここまで浸透しているとは呆れ返つてものが言えぬ。

に対し、国家神道の禁止と政教分離の徹底を指示する覚書を出した。これを俗に「神道指令」という。その中で「大東亜戦争」という用語の使用を禁止した。「太平洋戦争」と言えとは書いてないが、それに先立ち12月7日に、GHQは各新聞の代表者を集め、手製の太平洋戦争史を交し、これを新聞に掲載させた。そこで太平洋戦争なる名称が登場した。

この決議案は否決されたのであるが、野党各党の提案理由は、半世紀前のGHQの担当官の言つたであろうことと同じと思われ、ここに引用するのも馬鹿らしい。反対討論に立つた自民の議員は「私的な会合で言つたことで予算委員会とは関係ない」とかわしているが、少しも根幹に触れていない。我々としては何とも物足りない。とにかく正しい歴史認識が、大手を振つて通るような世の中にならぬと、国の前途が心配だ。

しかし、この名称は地理上頗るおかしい。インパール作戦が何んで太平洋戦争か、重慶爆撃が太平洋なのか。絶対権力を持っている占領軍のいうことだから、それは認めるが、我が国が独立を回復し、既に半世紀も経ているのに、いまだに太平洋戦争とは。

世論を操っているのはマスコミだが、彼等がことある毎に太平洋戦争というが、寒心に堪えない。些細なことのようだが、知らぬうちに国の独立が蝕まれてゆくのだ。

## 在米回天探査の旅

全国回天会 小瀧利春

イ空港に降り立った。

## (一)ハッケンサックの海軍博物館

大戦の終期、日本海軍は人間魚雷の採用に踏み切り、別表のとおり各種の型式の「回天」を相次いで開発し、製作を進めた。戦い終わって米軍は全回天の嚴重な処分命令を出し、米国に運んだもの以外すべてが爆破または深海投棄されて、日本の地上から姿を消した。

最近になって米国に実物の回天が三種類、三基現存することが判明した。われわれ搭乗員としては戦後五六年を経た今、かつて生命を託した兵器に再び手を触れたいとの思いはひとしおである。さらに在米回天の一部には型式に疑問あり、その説明はわれわれに課せられた責務と思われた。

その旅がこのほどようやく実現した。はじめは元搭乗員が二十人近く参加を希望していたが、日程が都合で急に繰り上がったことや健康面の事情から、結局七名でチームを組み渡米した。

平成十三年八月二十日の夕刻、成田を出発、ニューヨークに向かった。飛行時間が十二時間三十分、時差は夏季時間なので十三時間。日付変更線を越えて同じ日付のほぼ同じ時刻にケネデ

イ空港に降り立った。第一の調査目標はニュージャージー海軍博物館所蔵の「回天二型」である。ニューヨーク市の西の境界であるハドソン河を越えて、少し入ったハッケンサックの町にある。

回天二型は四四年八月、回天一型の兵器採用と同時に本格的な人間魚雷として開発が決定した。ロケット戦闘機「秋水」と同じ過酸化水素、水化ヒドラジン、それに石油を燃料にして水中速力四十ノットを出す。しかし四五年三月に製作中止となり、そのあと呉工廠で再開されて六月に二基完成、試運転に成功した。終戦後米軍が二基とも持ち去っており、その回天二型の一基が英国ポーツマス近郊の王室潜水艦博物館に前半分だけ現存する。

ハッケンサックにある回天は以前ワシントンDCの米国海軍工廠の広場に長いあいだ屋外展示されていたもので、のち海軍歴史センターの倉庫に移された。最初からこの回天は二型とされ、種々の刊行物にも「回天二型」と明記されている。

しかし、写真でみると胴体を構成す

る部分の数が一つ多い。接合部が余計にあるので外見上は四型である。二型が完成した時期の事情から、或いは呉工廠が大量生産した四型の胴体を使って二型を組み立てた可能性も考えられるので、中に入れて内部設備を調べないかぎりには型式の判定ができないのである。

それでハッチを開けてほしいと九十年以降文書照会を重ねていたが一向にラチがあかない。元搭乗員の井本武之助氏(兵七四期)、ついで全国回天会事務局長の河崎春美氏(甲飛十三期)が現地に行き調査したが、艇の内部に入ることは叶わず、判断できなかった。

そのうち九九年五月、この回天はドイツの潜航艇「ゼーフロント」とともに、潜水艦リングを展示するハッケンサックの博物館に移された。そして一年前「ハッチを開けた」と連絡があったので訪米調査旅行を計画し、参加希望者を募った次第である。

る手紙と、同文のメールを出してあったのに、これにも反応がない。行っても休館中では入れないであろう。日程を繰り下げれば、以後の航空券とホテルの予約を七人分切り替えなければならぬが、それが果してできるものか。

「訪米第一歩にして頓挫か」と皆がっかりしたが、思案したあげく「船を持つ施設が無人になることは多分あるまい。ともかく予定通り現地に行ってみよう。駄目ならそのときに考えればよい。当たって砕ける」と決断し、ハイヤーを契約した。

翌八月二十一日の朝、ニューヨーク四五番街の古めかしいルーズベルト・ホテルを出てラッシュユのなかをハドソン河を渡り、四十分で博物館に到着した。

回天は入り口に近い、緑の芝生のかにいた。事務所は案の定、閉鎖されていて扉をこじあけて怒鳴ったが誰もいない。しかし、川岸に浮かぶ潜水艦でペンキ塗りをしている人影が見えたので、訪問の趣旨を述べると、喜んで即座に回天に登れるよう脚立を用意し、館長を電話で呼んでくれた。

休日なので館長はかなり離れた自宅におり「皆で自分の家に来てほしい」と

しきりに勧めてくれた。気持は有り難いが、時間の余裕がないので断った。

回天二型は胴の直径が一・三五米と高く、中に足場がない。先頭の私は七八歳の文字通りの「老骨」で足に自信はないが、狭いハッチに手を掛けて飛び降りた。

内部の機器は大體揃っており、状態は良好である。真鍮の部品は昔のままに光って年月を感じさせない。鉄部は一面に赤錆びてはいるが表面にとどまらず、膨らんではいない。私は白い衣服のまま、汚れるのを覚悟して艇内に入ったのであるが、錆びや油が全くつかなかった。

問題は操縦席の前後である。前方には空気蓄器が四本、直立して並んでいた。これはハワイのものと同じ四型の構造であって、二型ならば過酸化水素のタンクがある筈である。操縦席後方はかなりの長さにならわって空洞であった。ここは二型なら水化ヒドラジンのタンクと蓄電池があり、四型であれば酸素蓄器が三本横たわっている筈であるが共に存在しない。しかし奥に見えたのは、斜めに八の字の形に配置された二本の補水タンクである。この様式は四型のものであって二型とは異なる。

なお頭部には回天四型との刻印があったが、これは付替えのできる駆水頭部(訓練用)なので、決定的要素にはならない。二型と四型は直径が同じであり、全長もほとんど変わらない。

このように、二型としての特徴は何ら見受けられず、逆に四型の構造が外見、内部設備とも存在することから、この「回天二型」は事実上は四型と思われる。戦時中二型、四型の製作を担当された技術士官がたに確認をお願いした上、結論を公表したい。

ただ、四型としても酸素蓄器が全くないことに疑問が残るが、これを取り付けられない状態で引渡したのか、または何らかの理由で艇を分解して抜き出したものであろう。頭部はボルト・ナットを外して付替えた形跡が明らかにあった。

潜望鏡(特眼鏡)は高く上げた状態で固定されている。塗装は全体が草色になっていた。「本物は艶消しの黒だった」と言ったら「回天は緑色だ、と誰かが言ったからこの色に塗ったばかりだが、早速塗り直す」と答えてくれた。

回天と並べても置いてある「ゼーフント」はドイツの、左右に魚雷を抱く「海龍」に似た構想の二人乗り潜航艇で、腐食がかなり進行している。意外にも外部の一部に木材を使っているが、そ

こも腐蝕して割れており、惨めな感じである。

この回天も屋外の雨ざらしでは、いずれ同じ運命であろう。現在は地面近くに置かれた状態であるが、屋内に入れるのでなければせめて架台を五センチほどに高くして、土の湿気から離す必要があると考える。

事務所の中で思いがけない物の発見があった。館員は「何だか分からない代物」と言っていたが、紛れもない回天一型の潜望鏡(特眼鏡)である。字も目盛りも綺麗で当時の新品であろう。われわれには何としても貰い受けたい貴重品である。

この博物館は新設から日が浅く、規模も小さいが、川岸に係留した米國潜水艦「リング」SS-199は活動状態のまま保存されており迫力がある。司令塔は立ち入り禁止、無線室には各種の通信機器がぎっしり詰まっていたレーダー、ソナーもそのなかにあるとのこと。急速潜航のベルを鳴らして艦長命令を演じてくれた。

棚の外に青年が寄ってきて「日本から来たのか」と聞くので「昨日ニューヨークについてばかり。この回天を調べに来た元搭乗員たちである」と言ったら、

彼は新聞記者で、直ぐに携帯電話で主筆とカメラマンを呼んだ。一人一人をつかまえて興奮気味にインタビューをとり、写真を撮っていた。社長も後からやって来た。翌日の州の新聞に記事が掲載される一方、ホームページで全米に流れたようである。

終わってニューヨークの街に戻ってから、夏時間で日が長いので国際貿易センタービルを訪れた。地上四一九米、一〇階の壮麗な巨大建造物の最上階に登って、展望台から眼下に広がる市街の風光を楽しんだが、僅か三週間あつとにハイジャックした旅客機を使って突入する事件が発生し、崩壊した。

「特攻」は、わが国土に迫ってくる敵艦に対する軍隊同士の戦闘行為であったが、この「テロ行為」は、平時に突如、民間人を大量殺戮した。一見、形は似ていても全く異質なものであり、一段と怒りを覚える。

## (二) キーポート海軍潜水艦博物館

米本土北西端のワシントン州の州都シアトル市と湾を隔てて向き合った半島に米海軍基地のひとつ、プレマートンがあり、その北隣の小さな町、キーポートに海軍が運営する潜水艦博物館



がある。近くには戦略原潜部隊の母港もある。

キーポートに回天が存在することは、潜水艦研究家として、また親日家として知られる副館長のウイリアム・ガルバーニ氏から九九年、私の許に一通の手紙が舞い込んできたことから判明した。まさかと思つたが、回天の各型の見取図を送付して照会したところ、数葉のカラー写真が送られてきて、駆水頭部付きの回天一型改一であることが確認できた。胴体右側の上半分の外板が切り取られて、内部構造が写真でもよく分かる。部品も揃っているようで、保存状態はかなり良好と見受けられた。

そもそも回天一型は約四二〇基が生産されていて次々と実戦に投入されており、終戦となつて各地に残っていた回天を米軍は徹底的に処分したが、大津島から訓練用の駆水頭部付き回天一型改一を四基、本国に持ち帰つたと同基地指揮官の板倉光馬少佐は語つておられる。

八月二四日朝、シアトルから高速船でブレマートンに渡り、この地方に二台しかないタクシーの一台に全員が乗り込んで博物館に到着、開館前であつたが招じ入れられて一同はガルバーニ氏と歓談した。

同館では各国の新旧各種の魚雷を集

め、綺麗に手入れしてわかりやすく展示している。広大な整備工場のなかにも多数の魚雷を保管し調査、設備中である。そのほか古今の潜水艦から潜水服、機雷掃海具、深海調査船「トリエステ」ほか、水中で使用される各種の実物や資料が陳列されている。片山舎なのでこれまで訪ねた人は少ないと思われるが、特に魚雷に関しては世界随一の施設であるまいか。

当地の回天一型改一は、真っ赤に塗装されているのは止むを得ないとして、各種機器が大体完備状態まで整備されており、望望鏡はワイヤーが新品に交換され、上下、旋回まで滑らかに出来る。故郷に帰つた気持と言ふか、元搭乗員たちにとっては堪らないほどの喜びであつた。なおこの回天は国立スミソニアン航空宇宙博物館から借り受けているものという。

米国海軍潜水艦の第一号「ホランド」SS-1が就役したのは一九〇〇年であり米国の潜水艦関係者は着実な発展を重ねた百年の歴史に深い感慨を持っているようである。

同日、米国最大の戦略原子力潜水艦「オハイオ」SSBN-726の艦長交代式がたまたま同博物館の大講堂で行われ、勸

乗員ほか家族、来賓多数が居並ぶなかで、サイドパイプの吹鳴に始まり新旧艦長ほかのスピーチが続いた。実に荘厳な雰囲気である。元帝国海軍としても共感を覚える式典であり、思いがけぬ幸運であつた。お国柄とはいえ艦長夫人が一緒に壇上にあがり、しかも大勢の人前でキッス、にはやはり戸惑つた。

### (三) ハワイ・ポーフイン潜水艦博物館

オアフ島パールハーバーのこの博物館で屋外展示されている回天は四型である。

本格的な人間魚雷として二型に次いで回天四型の開発が始まつた。九三式魚雷と同様、純粋酸素で石油を燃焼させ発生ガスで往復動機関を駆動する方式であるが、四五年三月に製作中止となつた。光海軍工廠でも「回天工作隊」を編成して四型の生産に取り組んでいたが、このときをもって打ち切られた。しかしその後、本土防衛のため量産が再開され、終戦のときは横須賀工廠で三基完成、組み立て中が一〇基、呉工廠でも三基が完成し、約一五基が組み立て中であつたという。

米国人は来歴にはあまり関心がない

ようで、どの回天も経緯がはっきりしないが、当方で調べたところではこの回天はもともとメリーランド州インディアン・ヘッドにあり、米国北東岸コネチカット州に移つてミスティック・シーポート博物館で屋外展示されていた。これがさらにハワイに移転したものである。

覗き窓から胴体の内部を観察できるので、操縦席の後に酸素気蓄器が存在し、その配列状況から四型であることが一目瞭然である。前方には直立する四本の気蓄器がならんでいる。駆水頭部の上面には回天四型用の、雷道計器を収めた舞鶴工廠製作の頭部であることが漢字で刻印されている。

前記の光工廠で回天の組立てを担当された技術士官武者広吉氏も以前、ハワイを訪ねて四型と確認しておられる。横須賀工廠で製作したものと考えられるとのこと。

内部は丁寧に銀色塗装されており、保存状態は良好、部品も概ね揃っている。海の近くであるが熱心な手入れを受けているので、長期保存の点には心配がないと思われる。

元搭乗員と名乗ればハッチを開けて中に入れてくれる。望望鏡がないのが残念であるが、これを加えれば一人間

「在米回天探査の旅」関連写真

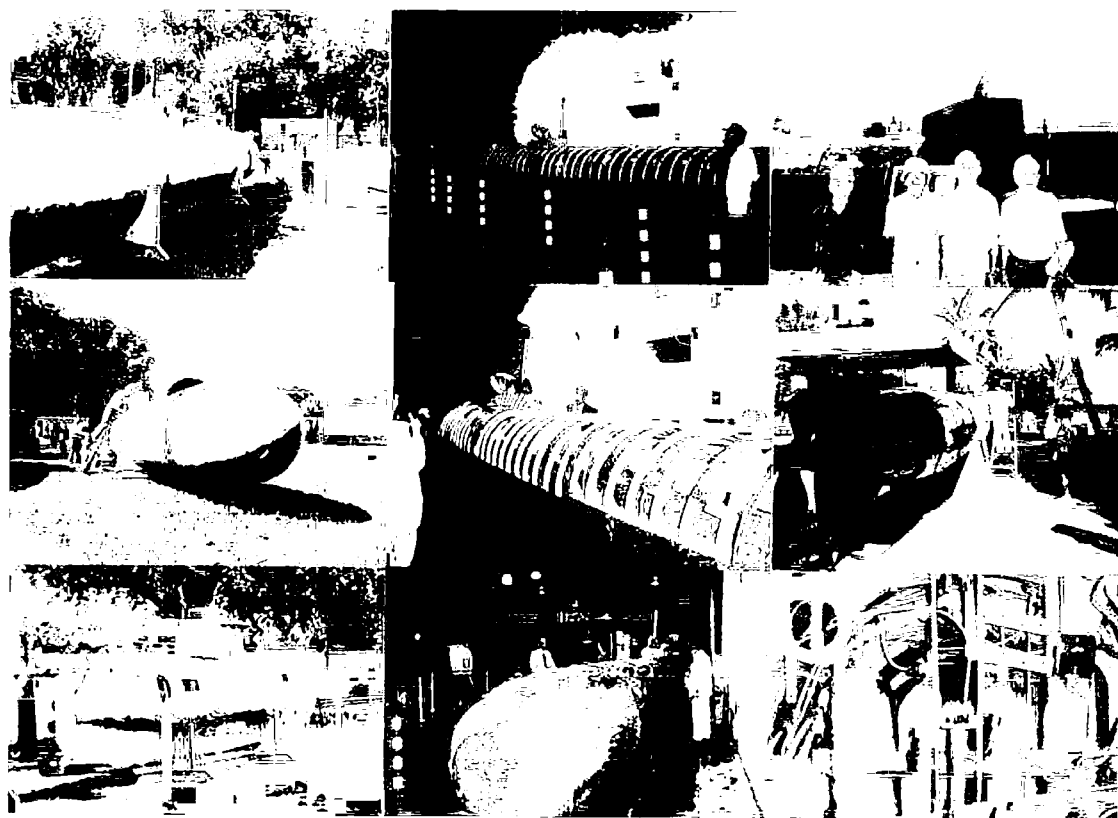
01.9.15

全国回天会 小瀬

ニュージャージー海軍博物館 ハッケンサック, NJ	米国海軍潜水艦博物館 キーボート, WA	ポーフィン博物館 パールハーバー, HI
回天四(ニ?)型 左前方から	回天一型改一 右前方から 全景	回天四型 ハッチの前で 河崎/水野/ 小瀬/宇井
同上 右前方から	同上 右舷上半分の外板を 切り取った状態	同上 右後方から
ドイツ二人乗潜航艇 「ゼーフント」 右後方から	同上 左舷前方から	同 艇内 操縦席前方 空気蓄器が四本 縦に立って並んで いる

「魚雷」の迫力が一段と強まるであろう。日本語をよく話す館員との間で詳細な情報交換ができ、また行き届いた世話で、同博物館に係留してある潜水艦「ポーフィン」SS-281、また海面下にある記念艦「アリゾナ」BB-39、その後方で威容を誇示する戦艦「ミズーリ」BB-63を効率よく見学することができた。

米園に残る三基の回天を訪ねる旅は、各地で温かい歓迎を受けて予期以上の成果を得た。このことが回天の事実を集積、整理してゆく上で一つの大きな前進になったと感謝に堪えない。在米回天が引き続き好意的な維持管理を受けて後世に永く姿をとどめることを願うものである。



## 回天各型要目比較表

01.9 全国回天会

型式	回天1型	回天2型	回天4型	回天10型
全長 M	14.750	16.500	16.500	9.000
胴径 M	1.000 魚雷部 0.610	1.350	1.350	0.70 魚雷部 0.533
重量 トン	8.3	18.37	18.17	2.3
安全深度 M 調定深度 M	80 最大15	100 ( 80 ?)	100 ( 80?)	20 固定 5
速力 X 射程 Kt M	30x 23,000 20x 43,000 12x 78,000	40x 25,000 30x 50,000 20x 83,000	40x 27,000 30x 38,000 20x 62,000	14x - 8x 30,000
搭乗員 名	1	1	1	1
炸薬量 kg	1,550	1,550	1,550	300
推進装置	93 式魚雷機関 2 気筒往復動	6 号機械 8 気筒往復動	6 号機械 8 気筒往復動	92 式魚雷機関 電動機
燃料	灯油 圧縮酸素	水化ヒドラジン 過酸化水素	灯油 圧縮酸素	蓄電池
出力 PS	550	1.500	1,500	
生産完成基数	約420 呉	2 呉	3 呉、3 横須賀	0 横須賀
実物展示場所	靖国神社遊就館 ワシントン州 キーポート 潜水艦博物館	英潜水艦博物館 米ニュージャージー海軍 博物館 (四型?)	米ハワイ パールハーバー 潜水艦博物館	京都天竜寺境内 (試作基)

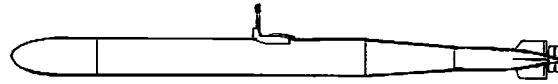
# 水中特攻兵器寸法・外形比較

(1/200)

95.3.30

小瀬

### 回天1型

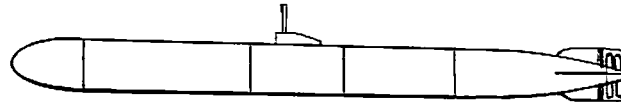


全長 14.75m

胴径 1.00m

搭乗員 1名

### 回天2,4型

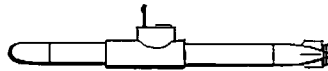


全長 16.50m

胴径 1.30m

搭乗員 1-2名

### 回天10型 試作艇



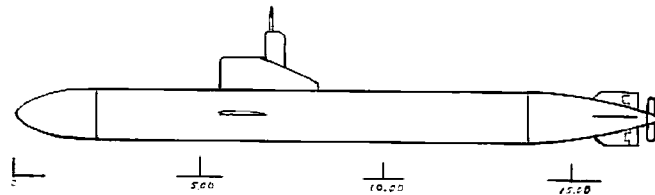
全長 8.65m

魚雷径 0.533m

中央胴径 0.70m

搭乗員 1名

### 海竜

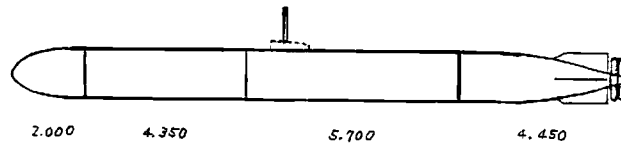


全長 17.28m

胴径 1.30m

搭乗員 2名

### 回天2型



2.000

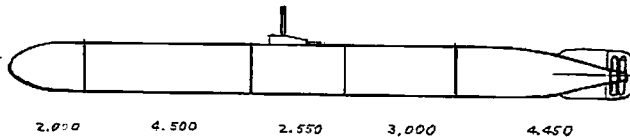
4.350

5.700

4.450

### 回天4型

在 ハワイ 潜水艇  
博物館



2.000

4.500

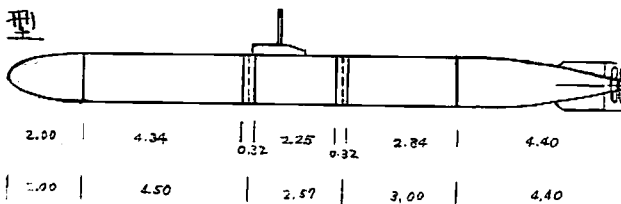
2.550

3.000

4.450

### 回天4(2?)型

在 ニュージャーシー  
海軍博物館  
(ハフケンサック)



2.00

4.34

0.32

2.25

0.32

2.84

4.40

2.00

4.50

2.57

3.00

4.40

前ワシントン海軍工廠

(井本武之助氏測尺)

## 回天を保有する各国博物館

01. 10. 15  
全国回天会 (小瀬)

- 米国海軍潜水艦博物館 (キーポート) -- 回天一型改一展示
- DEPARTMENT OF THE NAVY, NAVAL UNDERSEA MUSEUM  
610 DOWELL STREET, KEYPORT, WA 98345-7610  
Tel : (360) 396- 4148 X222  
<http://num.kpt.nuwc.navy.mil/>
- 米ニュージャージー海軍博物館 -- 回天四 (二?)型, USS LING (SS-297) 展示
- NEW JERSEY NAVAL MUSEUM, THE SUBMARINE MEMORIAL ASSOCIATION  
78 RIVER STREET, HACKENSACK, NEW JERSEY 07601  
<http://www.njnm.com/kaiten.htm>  
Tel : (201) 342- 3268
- ハワイ潜水艦博物館 (ボウフィン) -- 回天四型, USS BOWFIN (SS-287) 展示
- USS BOWFIN SUBMARINE MUSEUM & PARK  
11 ARIZONA MEMORIAL DRIVE, HONOLULU,  
HAWAII, 96818-3145  
<http://www.bowfin.org>  
Tel : (808) 423- 1341 Fax (808) 422- 5201
- 英国王室潜水艦博物館 (ポーツマス 近郊) -- 回天二型 (前半部のみ) 保存
- THE ROYAL NAVY SUBMARINE MUSEUM  
HASLER JETTY ROAD, GOSPORT, HANTS PO12 2AS  
Tel, Fax 0705- 510354
- 靖国神社 遊就館 -- 回天一型改一展示
- 東京都千代田区九段北 3- 1- 1 Tel 03- 3261- 8326  
<http://www.yasukuni.or.jp/>
- 徳山市教育委員会 (回天記念館関係 : 生涯学習課文化係)
- 回天一型改一の実物大模型を下記の記念館に展示
- 徳山市毛利町 2- 2  
〒745-0004 Tel 0834- 22- 8621 Fax 22- 8814  
<http://www.urban.ne.jp/home/citytoku/asobu/ozu/kinenkan.htm>
- 徳山市回天記念館  
徳山市大津島 1960  
〒745-0057 Tel, Fax 0834- 85- 2310 養浩館 Tel 0834- 85- 2030
- 「湯豆腐・嵯峨野」 -- 回天十型 (試作基) 展示
- 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ヶ馬場45 湯豆腐嵯峨野 店前  
〒616-8385 Tel 075- 861- 0277

以上

## 震洋特攻隊への

## 慰霊句碑建立

事務局長 木村 元正

(俳号 元生)

会報47号に記載されている震洋特攻隊の秘話に関し、私木村が属している俳句結社、玄鳥俳句会の主宰土肥幸弘先生の句碑建立に関する記述を紹介申し上げます。

先生は後述の句碑を本年(平成13年)七月十六日、高知県香美郡夜須海岸にある震洋隊殉国慰霊塔の直ぐ脇に、関係各位の承認を得て建立されました。当日は慰霊式が除幕式と兼ねて執り行われました。文中、注釈のない氏名は玄鳥俳句会々員であることを申し添えます。

なお本稿は執筆者土肥先生の転載承認を頂いております。

## ■句碑建立について■

## 震洋特攻隊と私

土肥 幸弘

甲種飛行子科練習生として、三重県一志郡香良洲町の三重航空隊に入隊し

たのは、昭和十九年九月十五日、私が旧制中学校三年の時である。

この日、当時の少年にとってあこがれであった、純白に七つボタンの第二種軍装に身を包んだ私たち甲飛第十五期生は、総勢二、六六三名であったという。

当時、志願に必要な年齢は満十五歳以上二十歳未満であったから、私は最年少であったうえ同期でも十指の中に入るチビであった。このハンディが、わずか一年足らずの軍隊生活ではあったが、ずっと私を苦しめた。

例えば、教科のなかにカッター訓練があったが、手が小さくて権(オール)が握れず、うまく漕ぐことができなかったし、非力の私にはオールを垂直に立てる「権立テ」には必死の力を要した。また、海軍の寝床は釣り床(ハンモック)であったが、これが扱いにきうえ背が低いので、フックに掛けるためには全力でジャンプを繰り返さなければならぬ。朝の「総員起シ」の際の「釣り床納メ」、就寝前の「釣り床卸セ」は毎日のことでもあり苦痛のたねであった。

そんなチビの私が予科練に合格したのは父のお陰であった。当時、予科練の一次検査の身体検査と学力試験は各府県の主要都市で実施されたが、父の

知り合いに身体検査の試験官がいたのである。父はその試験官に、「息子は背が低いので、よろしく頼む」と頭を下げたのである。試験官は胸をたたいて引受けてくれた。

いつの世でも、大事に育ててきた息子を戦争に取られることを望む親など、いないに違いない。父は、「そんなこととは言わずとも分かっているだろう。幸い息子は背が低く及落すれすれだから、ぜひ落として欲しい」と頼んだのである。

二、三日して試験官は父に、「安心しろ。少し身長が足りなかったが、ともかく合格にしておいたよ」と言ったそうである。父は安然として言葉が出なかったという。

そんなチビではあっても、運動神経や機敏さの点では人並み以上のものがあつた。三重航空隊に仮入隊して実施された二次検査の航空適性検査には難なく合格した。

また、教育途中で行われる操縦・偵察(偵察・通信・機銃)選別検査では、皆のあこがれであった操縦に合格した。結局それは実戦に生かされる機会はなかったのであるが、このことが、後に「震洋特攻隊」との出会いに結び付いたのである。

予科練には、私たち甲飛のほかに乙

飛もあつた。甲飛の受験資格が中学三年生の学力と十五歳以上であったのに対して、乙飛は国民学校高等科の学力と十四歳以上から受験することができた。(そのほか、現役から飛行兵になる丙飛もあつた。)ただし、乙飛は甲飛に比べて教育期間が長く、したがって、進級も甲飛より遅かった。乙飛は入隊後三か月で一等兵になるのに対して、甲飛は一か月で一等兵、三か月では上等兵に進級してしまうのである。この進級の遅速が甲飛と乙飛との反目や対立を招き、ときには傷害事件にまで発展することがあつた。

このようなトラブルを避けるため、甲飛は土浦航空隊、乙飛は三重航空隊にそれぞれ分離して教育することになった。ところが航空戦力増強の必要性から採用人員を大幅に増やしたため、練習航空隊の新設が追いつかず、私たち甲飛十五期生は、建設中の航空隊が完成するまでという条件付きで、乙飛の三重航空隊に間借りしたのであつた。

当時、高知市の池地区を中心に仁井田・十津にまたがる地に建設中であつた浦戸航空隊が、完成を待たず発足したのは昭和十九年十一月一日である。これに伴って三重に間借りしていた甲飛十五期生は、その大部分が、臨時

列車で宇高連絡船を経て高知駅に到着したのである。昭和十九年十一月下旬のことである。

この浦戸航空隊は、昭和十九年三月に建設されていた高知航空隊（現在の高知空港）とは別で、浦戸湾の入口の東、太平洋に面した海岸に飛行場があった。

昭和十九年末の戦況は、マリアナ沖海戦での大敗、サイパン・グアム島の玉砕、インパール作戦の失敗など、すでに制海権・制空権ともに失った日本は、米軍を本土で迎え撃つ本土決戦構想を本格化させていた。

そんな軍部にとって、まだ基礎教育の途中にある飛行練習生を、一人前の搭乗員に育てる余裕など、全くなかったに違いない。それでも予科練としての教育は行われていたが、昭和二十年に入ると、防空壕作りや本土決戦に備えるの陸地構築の土木作業へと重点が移っていたのである。

私たち十五期生は、昭和二十年三月には海軍飛行兵長に進級していたが、六月に入って予科連としての教育は中止され、本格的な陸地構築と陸戦隊としての教育・訓練へと移行していったのである。本来、航空機搭乗員としては必要ない軍刀を、家から取り寄せるように通達が出たくらいである。

私の父も、家にあった刀を軍刀に仕立て、急ぎ高知に駆けつけたのである。私は外出許可を取って、五台山を越え

高知城南の旅館で、入隊以来初めて父に面会した。その時の赤飯の母の手料理の味は、今も忘れることはない。ただ、その旅館がどこにあったか、何という名前であったかは記憶にない。

ところで、当時、高知の太平洋岸は、米軍が本土に上陸する重要な候補地の一つに想定されていた。そこで、本土決戦構想の一環を担って甲飛十五期生も他の部隊と共に、陸戦隊として分散配置された。操縦分隊は夜須・手結・生吉へ、偵察分隊は長浜・御畳頼・浦戸・桂浜へと派遣されたのである。

玄島高知大会の前年、大西昇月氏らの案内で夜須町手結を訪れたが、私がどこの民家に分宿していたか、全く思い出せなかった。また、絵金祭にも案内してもらったが、かつて外出で何度か行ったはずの赤岡の町も、私の記憶から欠落していた。

さて、私の派遣された手結のすぐ隣の香美郡夜須町の住吉海岸に、第二二八「震洋特攻隊」竹中部隊の基地があったのである。

震洋特攻艇は、全長五メートル、幅一・六五メートルのベニヤ板製で、艇

首に二五〇（三〇〇）キロの爆薬を装備し、敵艦に体当たりするものであった。終戦の翌日の八月十六日の夕方、私

たち手結派遣隊は、実戦装備で戦闘配置になっていた。土佐沖にいた米艦隊が接近中であり、もし攻撃を受けた場合は、ただちに反撃せよとの指令が出ていたからである。

と、その時、隣の震洋隊基地でスパーンという爆発音と共に、赤黒い火柱が何度か上がったのである。私は敵艦の艦砲射撃と思ったが、後の調査では出撃準備中の事故であったという。いずれにしても、すでに終戦を迎えていた翌日に、私たちとはほぼ同年齢の、二十

歳にも満たない多くの若者たちの命が失われたことは、悔やんでも悔やみ切れない痛恨事である。今その地に「震洋隊殉国慰霊塔」が立っている。そして寄しくもその隣をお借りして、私の第一句碑を建立しようとしている。

終戦の翌日であったにもかかわらず、出撃準備中の震洋特攻艇が次々と爆発し、住吉基地に配備されていた二十五隻のうち二十二隻の艇と、出撃準備をしていた百七十五名の隊員のうち百十

一名もの若い命が失われるという惨事

が発生した。なぜ終戦の翌日に、という疑問がある。そこで、一部は資料に基づきながら、当時、住吉基地のすぐ隣の手結岬に派遣されていた私たち呉鎮第十一特別陸戦隊（甲飛十五期操縦分隊）の動きを中心に、当時の状況を説明しておきたい。

昭和二十年八月十五日正午、重大な放送があるというのでラジオの前に集まった私たちは、それが終戦の詔勅だったのであるが、雑音がひどく、陛下のお言葉はほとんど聞き取ることができなかった。隊員の中には、「戦意高揚のお言葉であろう」という者もいた。

私たち末端の兵たちには、必ずしも終戦が徹底していたわけではなかった。私たちの本部のある浦戸本隊でも事情はあまり変らなかつた。呉鎮守府からの至急電で「終戦ノ詔勅煥発セラレタリ。シカレドモ敵上陸ノ企図アラバ断固コレヲ撃退スベシ」との指令を受けていたのである。つまり、陛下の終戦の詔勅はあったが、軍としての停戦命令は発せられていない状況にあった。

私たち手結派遣隊は、その夜、弾薬が支給され、宿舎の民家ではなく陣地の近くで待機の態勢で過したのであった。

翌十六日になっても状況は変わらなかつた。

た。呉鎮守府から浦戸本隊に「敵ノ機動部隊土佐湾ニ侵入セリ」との入電があり、即日待機命令が発せられたのである。

手結派遣隊もこれを受けて、「停戦であって無条件降伏ではない。敵が不法に上陸して来た場合はこれを攻撃せよ」との態勢を取るべく、震洋隊の爆発の起こる直前には、実戦装備で戦闘配置にしていたのである。これは、私たちの隊だけではなく、震洋隊も土佐湾に配備された他の部隊も同様であった。

このような、いわば、かつて経験したことのない敗戦という混乱の中で震洋隊の悲劇は発生したのであった。

戦闘配備の指令を受けた住吉海岸の震洋特攻隊竹中部隊では、横穴に格納してあった震洋艇を海まで引き出し、いつでも出撃できるよう整備を急いでいた。

エンジンの調整が終り整備の具合を確かめるため、責任者の少尉がエンジンのプラグを抜いたところ、漏れていたガソリンに引火した。いったんは総員退避して様子をつかがっていたが、火が収まったようであったので、震洋艇を海に下ろすべく艇の周りに隊員が集まったそのとき、突然爆発、次々と近くの艇へ誘爆していったのである。

ところで、どういう根拠で、敵の艦船が土佐湾に侵入したと判断したのであるうか。それは事実なのか誤認であったのか。

一説には、帰港中の漁船を敵の艦船と見誤ったのではないかとという。だが、敵が本土上陸をする可能性の高い土佐海域の監視を続けてきた軍が、そんな誤認をするとは考え難いことである。三重空甲飛十五期会の『予科練三百六十五日』の編さんに携わった矢倉芳男氏らの調査によると、生き残った震洋隊竹中部隊の少尉は、双眼鏡で実際に敵艦を見たと言っている。また、これには複数の目撃証言もあると書いている。

それを裏付ける資料として、八月十六日の午後、大本営からマッカーサー司令部へ宛てた次のような極秘電報を受けている。

「本十六日正午ゴロ、約十二隻ヨリナル艦船ノ一団、四国高知付近海岸ニ極メテ接近シ来タリタルトコロ、当ナオ我方ニオイテハ停戦命令発セラレアラザリシタメ、現地航空部隊ハコレヲ攻撃シ若干ノ被害ヲ生ジタルモノノゴトシ。(中略：午後四時になって停戦命令が出されている。)右命令ノ徹底スルマデハ連合軍ニヨル日本本土近海接近ハ遠慮アランコトヲ希望ス」

(公開された外務省極秘文書より)。

これらの文書からすると、敵艦の土佐湾侵入は決して事実誤認ではなく実際にあったことであり、米艦船と高知の基地から発進したわが国の航空機との間で、小規模な戦闘があったことが推察されるのである。

もちろん、震洋隊住吉基地の爆発原因や、その遠因となった出撃命令が出された経緯が分かったからといって、終戦の翌日に、多くの若い命が失われた、この悲惨な事故に対する鎮魂となるわけではない。

後世の人達が、このような悲惨な事故を招いた戦争を、再び繰り返さないで欲しいという願いをこめて、夜須町住吉海岸の「震洋隊殉国慰霊塔」が建立されているのである。

話は変わるが、甲種飛行予科練習生として志願した私たちが、海軍特別陸戦隊として手結に派遣され、どんな作業や訓練をしていたのか、その概略を紹介しておきたい。

日本がまだ戦勝のニュースに湧いていたころは、純白に「七つのボタン」の予科練のスマートな軍服は、「若い血潮の予科練の」という「若鷲の歌」とともに、当時の少年たちのあこがれの的であった。

だが、敗色濃厚となった私たち十五期生以降は、訓練を受けるにも飛行機やガソリンはなく、「ドカ練」という陰口のとおり、もっぱら蛸壺堀りや横穴陣地構築の土方作業に明け暮れていたのである。

だが、今になって考えてみると、もちろん経験者もいたであろうが、十一、七歳の少年が手作業で山腹に掘った陣地など、ものの役には立たなかったであろう。硫黄島にしろ沖繩にしろ、上陸に先立つ米軍の執ようなばかりの空爆や徹底した鑑砲射撃の前には、ひとたまりもなかったに違いない。

そんなことは百も承知の軍部が、どうして児童に等しい陣地の構築を急がせたのであろうか。事実、終戦直前には交替で夜間の作業が続けられたのである。

また、陸戦訓練なるものも、重装備の米軍に竹槍で向うようなものであった。

一例を挙げると、海岸近くに掘った蛸壺に身を隠して待機し、敵の戦車が近づくと、棒の先に爆薬を仕掛けた棒地雷と称するものをキャタピラに差し込んで爆発させ、戦車を立ち往生させようという対戦車訓練があった。また、戦車の後ろから駆け上がり、さく裂弾や炎瓶を投げる訓練もあった。



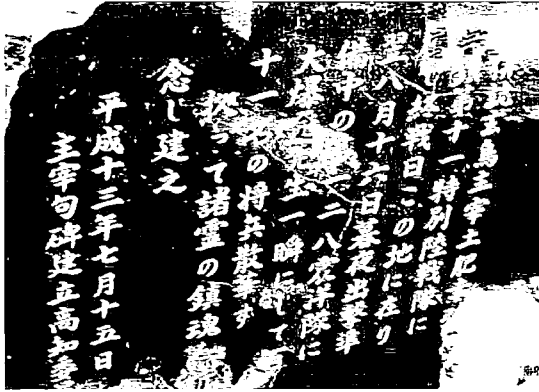
今から考えると、まことにバカバカしい戦法で、百に一つも成功するとは思えないが、それでも実戦を知らない私たち少年兵は、まるで運動会の練習をするかのように、まじめに熱心に訓練に励んでいたのである。それでも一度は、実際の陸軍の戦車を借りて実践的な訓練をした記憶がある。

ところで軍の本当の戦略は、上陸した敵を四国山地を始めとする山間部で段階的に迎え撃つというものであったに違いない。戦後、本格的なコンクリートのトーチカや横穴陣地が発見されているし、当時、満州から引き上げてきた師団を中心とする九万を越える兵力が四国防衛軍として展開していたという。してみれば私たち少年兵は、上陸に先立つ艦砲射撃によって、真っ先に戦場の露と消えるべき運命にあったのである。

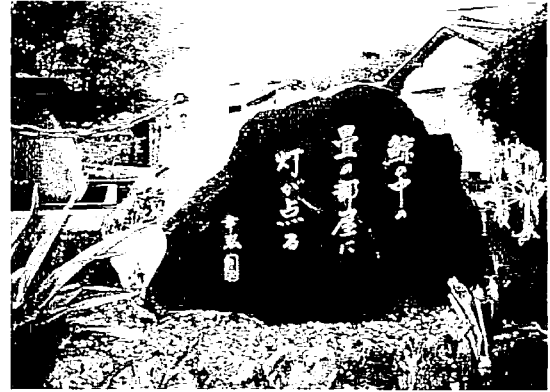
先日、大西昇月さんと住吉海岸に立った私の胸に、いろんな思いが去来した。

将来、戦争を知らない若者たちが、「震洋隊殉国慰霊塔」とその下の「鯨の句碑」を見て、どんな思いを抱くであろうか。

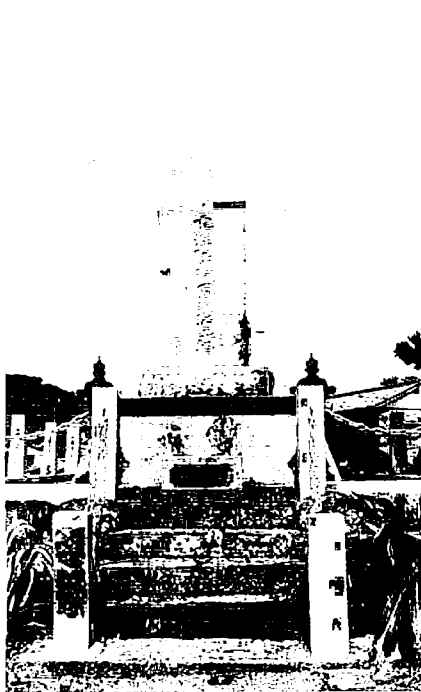
鯨の中の量の部屋に灯が点る 幸弘



裏面の碑文



主宰の句碑



読経 (手結真行寺住職)

# 第一御楯会解散に因んで

我が会の会員西村友雄氏が主催し、昭和五十一年から靖国神社で行ってきた第一御楯特別攻撃隊の慰霊祭は、平成十三年を最後とし会を解散するとの通知とともに、我が会に多額の寄贈をうけた。

第一御楯特別攻撃隊サイパン攻撃のことは会報二十九号に、また西村氏と第一御楯隊との関係は三十五号に述べ、更にビデオも作成頒布したが、ここに要点だけ重ねてのべる。

西村氏は同氏編纂の「第一御楯特別攻撃隊の全記録」の冒頭に次の通り述べている。昭和十九年十一月二十七日に硫黄島発進後、雲一つなく晴れ渡った中部太平洋の群青の空を、マリアナ諸島を日指して一路南へ飛ぶ零戦十二機と彩雲二機の編隊があった。

この零戦隊は館山基地の二五二空戦闘三一七飛行隊で編成された「サイパン特別銃撃隊」で、当時サイパンとテナアン島の敵基地に増強配備されつつあったB-29を銃撃により地上で撃破する任務を与えられていた。

出撃時の計画によれば、この部隊は困難ながらも救出生還の手段が構えられていた決死隊であった。しかしその成功の確率は極めて低く、隊員は当初

より生還を期せず、特攻と変わらぬ決意で出撃したのは明白である。

奇襲は見事成功し米軍を震撼させる成果を挙げたが、進撃中の事故で脱落した一機を除く十一名全員が散華したその十一名は、十二月十日連合艦隊から「第一御楯特別攻撃隊」として全軍に布告され、二階級特進の荣誉に輝いた。その十一名は

- 中尉 大村謙次
- 飛曹長 小野康徳
- 上飛曹 北川磯高
- 一飛曹 住田広行
- 一飛曹 東 進
- 一飛曹 加藤正人
- (一飛曹 松下武男)
- 二飛曹 可城三成
- 飛長 新堀清次
- 飛長 上田裕次
- 飛長 高橋輝美
- 飛長 明城 哲

右のうち松下一飛曹は進撃中プロペラで波頭を叩き航行不能に陥り、バガン島に不時着し生還したが、後に帝都防空戦闘で戦死した。

誘導並びに戦果確認に任じた彩雲搭乗員はつぎの通り

- 操縦員 広瀬正吾飛曹長
- 電信員 西村友雄上飛曹
- 機長(偵察) 南 巍 少尉
- 電信員 淵上大四郎一飛曹

南少尉は後に沖繩作戦で戦死し広瀬飛曹長も先年故人となった

- 二番機 消息を断ち未帰還となる
- 機長(操縦) 江浪寅六少尉
- 偵察員 藤川高雄上飛曹
- 電信員 淵上大四郎一飛曹

銃撃隊員一同が出撃にあたり生還を期さなかったことが、ビデオの中で西村氏の語りによく表れている。

「私は彩雲一番機の電信員として、この作戦に参加しましたので、記憶する作戦行動の概略をお話致します。

1、零戦隊は、27日午前8時硫黄島を発進したら、マリアナ諸島北部のアグリガン島まで、彩雲一番機の誘導を受ける。そこからはマリアナ諸島の列島の東側を、島の頂上が見える程度離れて、高度50m以下で南下する。

目標のサイパン島アスリート飛行場を確認したら、その直前で超低空から、一気に高度300m以上に引き上げ、そこから急降下してB29を銃撃する。

その時、第一撃で炎上したら、次の目標を攻撃するが、第一撃で炎上を確か出来なければ、同じ目標を再度銃撃する。しかし何れにせよ、帰りの燃料が不足するから、第三撃は行なってはならない。

そして第二撃が終わったら、速やか

に戦場を離脱して、バガン島飛行場に向かい、不時着するように。バガン島には、我が軍の守備隊がいるから、不時着搭乗員は12月中旬、潜水艦で救出する事になっている。

2、彩雲一番機は、アグリガン島迄零戦隊を誘導した後は、レーダーに探知されないように、列島線の西側を100m以上離れて南下し、零戦隊の攻撃予定時刻、12時10分の10分後に、目標上空1万m以上の高度で、写真撮影を行い、戦果を確認する。

3、彩雲二番機は、ウラカス島附近までは、零戦隊の後ろを飛んで、そこからは単機でバガン島に行き、バガン島部隊の使用する、暗号書と連絡文書を投下する。その後は一番機と同様、戦果確認偵察を行う事とする。

指示された作戦行動は以上ですが、この作戦会議が終って外に出た時、居合わせた参謀の一人が、零戦隊の若い隊員達に、「計画通りにバガン島まで帰るのには、サイパン上空で5分位しか行動出来ないがどうするか」と問いかけました。すると、彼等全員は間髪入れず「突っ込みます」と答えました。

側で聞いていた私には、今でもその言葉が耳について離れません。

その翌日の11月27日、零戦隊、彩雲隊18名の搭乗員を前に3航艦長(官寺岡

中将の訓示があつて、その後、寺岡長官と一緒に記念写真を撮りました。これがその写真です。



次に彩雲一番機が誘導して飛行し、アグリガン島上空で別れる場面までの語りが感動的なので、その部分を引用してみる。

午前8時、硫黄島基地隊員の「帽振れ」に見送られて、元山飛行場を発進した零戦隊は、千鳥飛行場を離陸した彩雲に誘導され、一路南下しました。

この日南の空は、綺麗に晴れ上がり、誘導には絶好の飛行日和でした。

私が座っていた彩雲の後部座席は、

他の飛行機と違って、後ろの見張りがし易いように、後ろ向きでした。従って私は、2時間半の誘導中、零戦隊12機を正面に見ながら、向き合っていたわけです。

その間、零戦隊員の決死の覚悟を思うと、万感胸に迫るものがあり、私は「もしも、自分がこの戦争で、生き残るような事があつたならば、この状況を遺族に伝えなければならぬ」と心の中で固く誓いました。

10時40分、アグリガン島が見えてきました。いよいよ零戦隊分離の時です。彩雲一番機の機長南少尉の指示で、操縦員の広瀬飛行兵曹長は、分離の合図として、二度三度バンクしました。

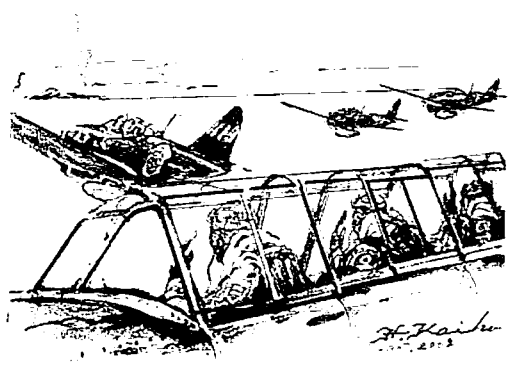
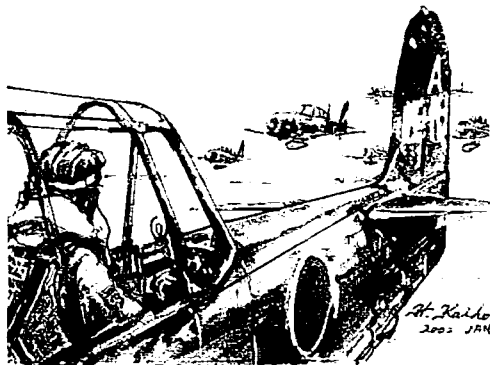
大村隊長は、小さなバンクでそれに答えると、すぐ緩やかに主翼を左に傾けて、降下姿勢に入りました。列機が一斉にそれに従います。別離の瞬間です。我達3人は無言のまま、挙手の礼でこれを見送りました。

私は、最後まで見届けようと、目を凝らしました。アグリガン島の北側の空を、突入するように降下する零戦隊は、みるみる内に、小さくなり、点となり、キラキラ輝く紺碧の海の色に、溶け込むように、消えていってしまいました。

この場面における西村さんの話はこ

れで終わるが、分離していった12機の零戦はバガン島に不時着した松下機と、攻撃後バガン島に戻った明城哲飛行兵長の機を除き、永遠に日本軍の目に触れる事はなかった。だが明城機は、バガンまで追跡してきた米軍のP47戦闘機に撃たれ、戦死してしまつた。

おそらく、この明城機は、大村隊長から事前に「銃撃後は、バガンへ戻って報告するよう」指示されていたのであろう。



少飛会海法画

今期の戦史

①

この会報は2月、5月、8月、11月の年四回発行となつています。四半期ごとの発行です。そこで今後発行月とその前後の月の三ヶ月間にあつた戦史をこの標題のもとに掲載してみましよう。戦史は特攻作戦のものとして余り間口を狭くすると長続きしませんので、特攻的ということにしておきます。会員諸氏の投稿をお待ちします。そのような作戦を目途に訓練したことも結構です。自分の体験したことに限るわけではありませんで、所属した部隊のことや戦史研究の成果など進んで発表して下さい。

海軍落下傘部隊の活躍

15年末以来横須賀航空隊内、ついで館山砲術学校内に於いて鋭意研究と要員養成を行つていた。その間三名の殉職者を出したが、屈することなく要員養成を続けた。

11月16日、軍令部総長以下海軍首脳部立会いのもと、霞浦で最後の総合訓練が行われた。演習の構成は、霞浦飛行場占領ということで、三十数機の輸

送機は、堂々の編隊を組み、百千の花が湖を見下ろす台上に咲いた。

この総仕上げの演習が終つて、それぞれ七五〇名の降下員を基幹とする二つの部隊を編成した。

横須賀鎮守府第一特別陸戦隊(堀内部隊)と同第三特別陸戦隊(福見部隊)だった。

同じ頃、陸軍では教導挺進第一聯隊が、10月初にできており、10月中頃に参謀総長、陸軍大臣等首脳部が立会いし、海軍が霞浦でやつたと同じような総合演習を実地した。場所は宮崎県の唐瀬原であり、演習は、精油所占領を設想したものだ。海軍より一ヶ月ほど早い。海軍が一ぺんに二個隊作つたのに対し、陸軍は二番目の聯隊が出来る上上がったのは、12月の末だった。

メナド攻略作戦

編成早々の両陸戦隊は、11月26日、微用輸送船新田丸に乗り、密かに東京湾を出て台湾に向つた。まだ開戦になっていない。

高雄に上陸して嘉義飛行場に入った。ここは陸軍の飛行場だったが、陸軍航空部隊は更に南の屏東、佳冬、潮州に作戦展開し、嘉義は空いていた。輸送機隊もすぐに追求し、両隊は休

む暇なく、降下訓練と陸上戦闘訓練に明け暮れる。意気盛んであつても、二ヶ月余りの速成訓練では、どちらもまだ十分ではない。ここでまた吹き流し状になって一人を失う。予備傘を着けていなかった。

12月8日開戦。真珠湾攻撃のニュースに基地内は沸き立つ。

陸軍落下傘部隊の挺進隊第一聯隊は、この翌日宮崎県新田原基地を出発し、南方に向うのだが、勿論お互いには何も知らない。

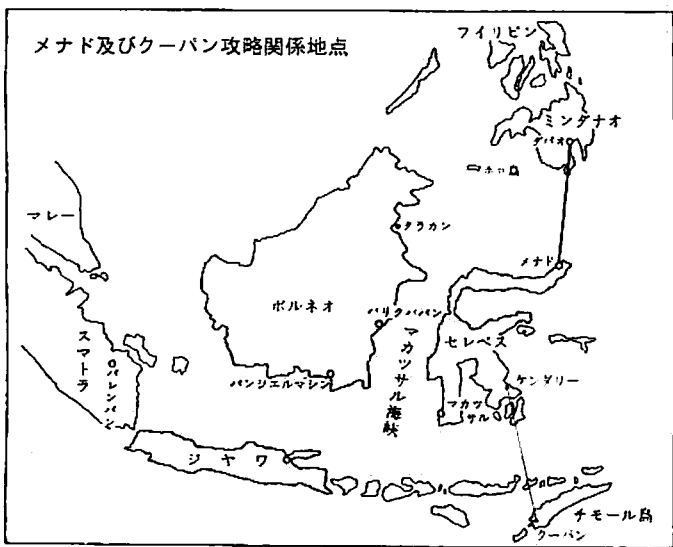
嘉義にいる海軍落下傘部隊のうち堀内部隊は、12月下旬、輸送機でダバオに前進した。

ダバオはミンダナオ島にあって、セレベス海を制する要地。陸軍の坂口支隊が12月19日夜ここに上陸し、激戦の末ダバオ市と飛行場を占領した。占領後海軍の基地航空部隊がここに進出し、警備も海軍が担当している。

大東亜戦争の目的は石油資源獲得だが、その資源は、ジャワとスマトラにある。フィリピンやマレーは目的地向くための邪魔物のようなものだ。蘭印(今のインドネシア)の本拠はジャワであり、大本営としてはジャワ攻略を最も重視していた。

結果的には、ジャワは簡単に取れたのだが、初めはそう簡単には片付くまいと思つていた。

ジャワの北にはボルネオが横たわつ



メナド及びクワン攻略関係地点

ている。これはジャワよりも大きい島だが、内陸には資源的にも軍事的にも価値あるものはない。そこで、ボルネオの両側を通過してジャワに迫るといふことになる。その進路に沿う作戦上の要点を、次々と奪取してゆかねばならぬ。要点というのは航空基地である。

東側の通路を扼する要点として、ボルネオ島のタラカン、バリッククパン、パンシエルマシなど、セレベス島のメナド、マカッサルなどがある。

特にマカッサル海峡（ボルネオとセレベスの間にある海峡）の入口両側に頑張っているのが、メナドとタラカンである。

この方面の航空作戦は、海軍の第十一航空艦隊が担当していた。第十一航空艦隊では、メナドかタラカンの攻略に、落下傘部隊を使う考えだった。

余談になるが、ボルネオの西側を通過してジャワに迫る進路に沿って同じような関係位置にあるのが、パレンバン飛行場だった。パレンバン精油所は、戦争目的のものだったが、飛行場は、ジャワ攻略の一布石だった。

この方面の航空作戦は、陸軍航空が主体になっていた。陸軍の落下傘部隊がパレンバン飛行場奪取に使われた。

ジャワ攻略の両進路に沿って左右対

称の位置に、陸海軍の落下傘部隊が期せずして使われたということは、興味深いことである。

さて話は元に戻り、海軍落下傘部隊の目標として、メナドとタラカンが挙げられていたが、1月7日になって、メナドに決定した。タラカンに降下するためには、ホロ島の飛行場を使わねばならないが、この飛行場の整備が間に合わなかったためである。

メナド降下は1月11日。タラカンには、同じ日に陸軍の坂口支隊が上陸作戦を行うことになっていった。

いよいよその日、堀内部隊長の指揮する二個中隊三三四名は二八機に分乗し、〇六三〇ダバオを發った。研究員が初めて降下してから丁度一年でこれまでになったということは、どの國の空挺部隊にも例はない。

行くこと三時間、セレベス島附近の洋上で思わぬ椿事が起きた。

味方水上機が、何を感じ違ひしたのか攻撃を仕掛けて、輸送機を一機撃墜してしまつた。高射砲が間違つて友軍機を射撃したという例はあるが、空中戦闘をやつたということとは、前代未聞である。戦争中は勿論極秘にされていた。

〇九五二ランゴアン飛行場上空、対地高度一五〇で一斉に降下。飛行場に

は、トーチカがあり、滑走路には障害物が置いてある。投下した物料を拾う暇もなく、拳銃と手榴弾だけで応戦する。

味方の戦闘機が超低空で飛ぶが、彼我混淆して支援もできない。敵は装甲車まで繰出して来た。

物の力だけでは、敵側が絶対優勢だったが、二番目に降下した中隊が、敵トーチカ陣地の真上と背後に着地するに及び、敵が崩れ出した。防者と攻者の心理的な違いは大きい。激戦二時間でランゴアン飛行場を占領した。戦死三名、重傷二六。

夕方までにカカス市街及び水上機基地も占領した。カカス市の北にトンダノ湖があり、ここに、速射砲や医務隊を乗せた飛行艇二機が着水し、降下隊と合流することができた。

翌12日、後統の中隊七四名が降下し、この日の夕刻には戦闘機一〇機と偵察機一機が、着陸した。

前日未明、ケマとメナドにそれぞれ千数百名の陸戦隊が上陸したが、この部隊とも12日昼頃連絡成り、メナド地区の攻略が完了した。

かくして、わが國が極秘裡に編成していた落下傘部隊が、初めて戦場に姿を見せたのだが、國民にはそれが発表されなかった。陸軍がパレンバンに奇襲的に使用しようとしていたので、海軍に對し発表を待つてくれるよう頼んだのである。

相手はどちらもオランダ軍であり、どれほど奇襲のたしになるか疑わしいが、海軍はこれを了承した。

パレンバン空挺作戦は、これより一月遅れ2月14日に実施、翌15日十分差で次のように発表された。

大本營發表（二月十五日一七〇〇）  
帝國海軍落下傘部隊ハ去ル一月十一日「セレベス」島攻略ニ参加シ赫々タル戦果ヲ収メタリ

大本營發表（二月十五日一七一〇）  
強力ナル帝國陸軍落下傘部隊ハ二月十四日一一二六分蘭印最大ノ油田地帯タル「スマトラ」島「パレンバン」ニ對スル奇襲降下ニ成功シ敵ヲ撃破シテ飛行場其ノ他ノ要地ヲ占領確保スルトトモニ更ニ戦果ヲ拡張中ナリ

これを聞いた國民は、わが國が、陸海軍兩方にこのような素晴らしい部隊を持つていふことに驚き、かつ感激した。そして戦争目的に直接繋りをもつ油田地帯を奪取したということ、陸軍落下傘部隊に、より多くの魅力を感じたことは否み難い。

海軍落下傘部隊に対しては気の毒なことだった。



メナド降下の絵

### クーバン攻略作戦

嘉義に待機しているもう一つの部隊、横須賀第三特別陸戦隊(福見部隊)をどこへ使うべきか、第十一航空艦隊司令部では迷った。メナド降下作戦が予想外に損害多く、生れたばかりの精鋭部隊を、つまらぬことに使ってはならぬという考えがあった。しかし、漫然と待機させておいては士気に影響する。嘉義からタラカンに招致した。パリックパパン攻撃に使用しようとしたが、パリックパパンの飛行場が、大したものでないことが判明して取りやめとなり、次でパンジェルマシンの攻撃に使う案も出たが、これもジャワ攻略にそれほど必要ないということで、見送った。

これらの目標は、マカッサル海峡を通過して東部ジャワに迫る進路沿にある。ところが、蘭印攻略の進路は、セレベスの東側にもう一本ある。この進路の突き当たったところが、チモール島だ。この島を奪取するのは、ジャワの手足を挽き取るような具合になる。結局、チモール島のクーバン飛行場を狙うことになり、海上輸送でセレベス島のケンダリーに進出した。チモール島は、東半分がポルトガル領、西半分がオランダ領、陸軍の東方支隊(第三十八師団の一個聯隊基幹)が、クーバンとデリーに上陸するが、それに先駆けてクーバンに降下することに決定した。

メナド作戦で敵飛行場に直接降下し若杯をなめたので、今度は飛行場東北方四キロの草原に降下することにした。前回と同じく、第一日は二個中隊(三〇八名)翌日残りの三三三名が降下する。輸送機は二八機が二往復という計画だった。

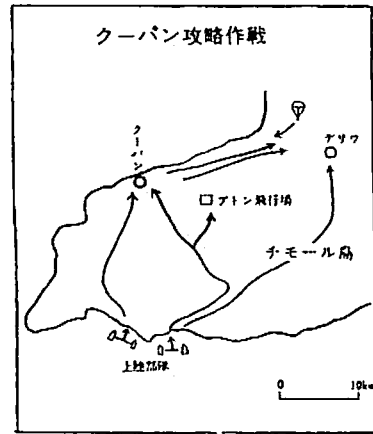
2月20日一〇三〇計画通りに降下した。草原と思ったのは膝を没する湿地だったが、敵がいなくて、完全に武装を整えることができた。

態勢を整え道路沿いに飛行場目掛けて前進すると、敵の兵舎があ

る。これは難なく占領したが、やがて飛行場方向から次々と敵が現れ激戦が展開された。装甲車も機銃を掃射しつつ突進して来る。

この日未明、わが陸軍部隊はマリー岬に上陸し、クーバン市に迫りつつあったが、クーバン附近にいた二、〇〇〇の敵は、これに怯えて東方に退却した。後で判明したことが、落下傘部隊がこの敵の退路を遮断する恰好になった。窮鼠猫を咬むというが、この敵がなかなか強く、戦死二四、重傷三五の損害を被るに至った。

翌日、プトン飛行場(クーバンの飛行場)に到着したが、そのときは、落下傘部隊の一部で陸軍と一緒に海路上陸した者の方が、先に飛行場に到着しているという奇妙なことになった。



### 協会発行の書物紹介

(小冊子)

○遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情

A5版 60頁 六〇〇円

○特攻隊員の日記

A5版 70頁 七〇〇円

(単行本)

○B29との戦い

A5版 160頁 一、五〇〇円

○特攻隊遺詠集

A5版 221頁 二、〇〇〇円

○愛は終り無く

A5版 209頁 一、五〇〇円

沖繩洋上に散華した特攻隊員と将来を約束した一女性の回想記

○長い日

A5版 120頁 一、〇〇〇円

生き残り特攻隊員の手記

会員吉武登志夫氏(陸士57期)著

### 会員の発行した単行本

○特攻の実証

A5版 210頁 一、八〇〇円+税

○静椰子

A5版 334頁 二、〇〇〇円+税

右の二冊は会員小川武氏(特操一期)の体験記で、鳥影社から出版されている。希望の方は事務局まで連絡下さい。

○特攻の真実

四六版 340頁 一、八九〇円

会員深堀道義氏(海浜75期)が研究成果を纏め原書房から出版されたもの。希望の方は事務局まで連絡下さい。

○訂正記事

会報48号19頁最下段2行目

根本大尉は根本大尉の誤りにつき訂正致します。

# 忘れ難い人たち 回天⑩

小灘 利春

## 今西 太一

京都府出身、海軍兵科三期予備士官、回天搭乗員。菊水隊伊三六潜で出撃、昭和19年11月20日ウルシー敵泊地に突入戦死。没後海軍大尉。



故・今西太一大尉は慶應義塾大学経済学部を昭和十八年九月卒業、海軍兵科予備学生を志願して水雷学校魚雷艇学生となったが、さらに志願して回天の訓練基地が創設された山口県大津島に、最初の予備士官搭乗員十四名の一

人として着任した。  
初の回天特別攻撃隊菊水隊が潜水艦三隻を以って編成され、今西少尉は伊号第三六潜水艦搭載の回天搭乗員となり昭和十九年十一月八日、大津島を出撃した。二隻がカロン諸島ウルシー

環礁に向かい、二十日未明、伊四七潜からは回天四基が全て発進、一方伊三六潜は三基が直前に発進不能の事態に陥り、今西太一少尉の回天ただ一基が発進して北東の入り口からウルシー泊地へ突入した。

発進した回天併せて五基はそれぞれどのように行動したか。これまでの各種資料は時刻と地点の記述が明らかでないため漠然としていたが、最近公開された米海軍の秘密資料を分析した結果、ようやく五艇それぞれの戦闘状況とともに、終末の地点と時刻がほぼ確実に判明するに至った。

時刻帯がこの水域では同一である)

本年五月、米国海軍の潜水チームが初めて「ミシシネウ」の沈没位置を特定し、潜水して損傷状況を調査、写真撮影を行った。事実は、環礁内の北部泊地と伊四七潜が分担した南部泊地との中間に同艦は沈んでいた。また爆発時刻の点では、今西艇はもとより、どの艇にも命中の可能性が成立するのである。

これ以上資料を集め検討を続けても「ミシシネウ」に命中した艇が誰であったかを特定することは永久に不可能であろう。「菊水隊の五人が挙げた戦果」それでよいではないか、と私どもは考える。米国の研究者にはその主旨を、根拠とする分析資料を添えて申し入れた。

水雷学校出身の兵科三期回天搭乗員で只一人生存する藤田克己氏は故・今西太一大尉の印象を「京都弁のやさしい、思慮深げな友」と語る。名高い京都市下京区東本願寺の御用達であった和菓子のお爺に育ち、温厚な人触りであるが、芯のしっかりした外柔内剛型であった。

父上と妹フミ様に宛て出撃の朝したためた遺書には「日本は非常の秋に直

面しております。日本人たるもの、この戦法に出づるのは当然のことなのであります。日本人として、この真の生き方の出来るこの私、親不孝とは考えておりません」と、特攻に向かう真情を述べた上、家族ひとりひとりへの愛情と感謝を綴り、今後の幸せを願って

潜水艦には今西艇との間の交通筒がなく、沖合いで〇〇三〇に浮上して搭乗員が艇に移乗し潜航、発進地点に進出した。到着したのち、他艇が次々と故障を生じ発進が遅れているのを知ると、その心優しく物静かな今西大尉は「では自分の艇だけでも早く発進させて下さい」と何度も電話で艦長に催促し、決然と発進していった。

墓所は京都市東山区の大谷本廟にある。



炎上するミシシネウ

## 異色ある川南護国神社の話

田中 賢一

護国神社は大抵県単位に設けられているが、この社は宮崎県児湯郡川南町で維持している。町の護国神社であるから、同町(かつては村だった)出身の戦死者をお祀りしてあるのだが、それ以外にこの地に基地があった陸軍挺進部隊の全戦死者をお祀りしてある。村出身の英霊は六三四柱であるが、挺進部隊関係の英霊は一万二千と言われている。そして毎年十一月二十三日に奉賛会長である町長が祭主となって盛大な例祭が行われている。これには深い理由がある。

## 川南護国神社建立の経緯

## 挺進神社焼き払われる

川南村豊原にあり一六部隊の名で村民に親しまれていた陸軍挺進練習部の、本部庁舎に向かって右手に、挺進神社があった。昭和十九年に建てられたもので、コンクリートで固めた高さ一米足らずの台の上に、それほど大きくない社がのっていた。社名が示す通り挺進部隊の戦死者や殉職者を祀っていた。

十九年秋挺進練習部は挺進集団に改



編まれ、集団主力はフィリピンに出動し、内地には第一挺進団が残ったので、挺進神社の守護は勿論この部隊が担当していた。

終戦に伴い第一挺進団司令部残務整理班は、同年十一月三十日をもって解散させられたが、挺進団長中村大佐は、南方から帰還する挺進部隊将兵で、降下場に帰農を希望する者の世話や挺進神社の守護については、道義的責任があるとの堅い信念のもと、村内に寄寓し浜で塩焚きなどして、糊口を凌いでいた。

その頃戦災で焼け出された宮崎の師

範学校が、挺進団司令部やその西にあるもと第一聯隊の兵舎に引越して来た。同校男子部の部長は氣迫のこもった人で我々も会ったが、挺進神社の守護は私どもがやります、生徒の精神教育にも活用しますと言われたので、中村大佐をはじめ我々は安心してた。

挺進戦車隊長で終戦になった私は、その頃降下場の一隅に帰農していた。正確な日時の記憶はないが、二十一年の初夏の候だったか、日向日々新聞に「白衣の軍歌と駆足に悩まされている師範学校寄宿舎の生徒たち」という見出しで、川南の旧兵舎の周りを夜になると白衣の一団が走り回り、軍歌やラッパの響きで生徒は眠れない、と書いてある。かつて体操衣袴で盛んに走り回った処である。その新聞を見た直後だったか、村の人が挺進神社が米軍に焼き払われたと教えてくれた。

早速駆けつけてみると、社は無残にも焼け落ちていて中村大佐は既に来たり、泣きながら焼け跡から釘類を拾い集めていた。師範学校の庶務の先生がいうのには、突然米軍が現れ「学校に神社があるのは怪しからん、直ぐ焼き払え」というので「中村大佐から預かっているのだ」といったところ「中村大佐にはもう言っている」とて、有無を言わず火をつけさせたという。

(中村大佐には事前は何んの知らせもない)行場を失った御祭神が幽霊になったのだと、入殖している復員者一同悲憤に暮れた。

中村大佐は終戦までは高鍋町に借家ではあるが、身分相応の家に住んでいたが、敗戦とともに期するところがあつたか、村内の片田舎唐瀬の竹藪の中にあつた家に移り住んだ。この家は高鍋にあった県地方事務所が、改築の際にた壊材をもらいうけて、かつての部下が建てたもので、開拓者の家よりひどい小屋だった。中村大佐は家の中に神棚を設け、焼け跡から拾い集めた釘類を御神体としてお祀りした。

唐瀬の旧家の石川富士之助翁が見るに見かねて、自宅の仏壇を改修してここにお祀りすることになった。この人の次男も戦死しているので、懇ろな供養をしたところ幽霊騒ぎもいっしか治まった。

## 靈堂の再建

トロントロン(部落の通称)に以前戦死者を祀る靈堂があったが、終戦直後の台風で倒壊したという。中村大佐はこれを知って、靈堂を再建しここに祀りすることを思いついた。我々も石川翁の仏壇では拝みにも行けないしと思っていたので、大賛成でこの案を





再建できた霊堂

説いて回った。いくら復員開拓者がその気になっても、在来の村民が動いてくれないとどうにもならない。だいたい我々にはお堂を建てる財力は全くない。村の有力者達は趣旨には賛成してくれるが、今そんなことをして米軍に咎められはしないかと、心配して動いてくれない。我々の方は米軍何するものぞという敵愾心がある。そのような状態で住再三年ばかり過ぎた。中村大佐の私生活は赤貧洗うが如き有様だったが、初志翻すことなく折りにふれては村民を説いた。遂にその志が天に通じたのか、村長以下が動き出してお堂の建設が決まった。

念願の霊堂は遂に出来あがった。それは決して大きな立派なものではなかったが、一番喜んだのは言うまでもなく中村大佐だった。同大佐は次の通り書きのこしている。

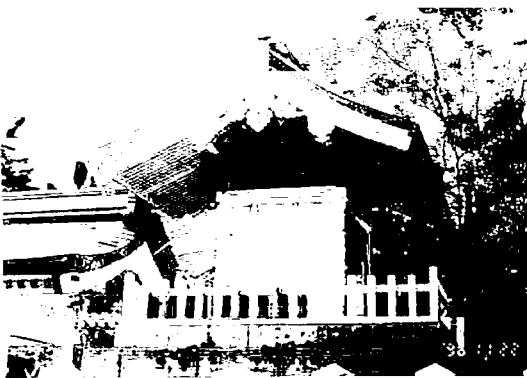
「挺進神社焼打ちより四ヶ年、転々としてその居を移した一万二千の英霊は、ここ地元英霊と共に安らかに合祀されたのである。こうして昭和二十四年三月二十四日の春の彼岸を卜し、感激の慰霊祭が盛大に施行された。思いの感激を胸に参集した村人は、霊堂の境内を埋め尽くして外に溢れ、日向街道の交通は一時途絶するに至った。その数二千人を越え、村始まって以来の人出であったという」

村の有力者が危惧していた米軍の干渉はなかった。我が国が独立を回復した後、村の遺族会の手で霊堂を本殿としその前に拝殿を建て、更に鳥居も造り、川南護国神社とした。

現在のように十一月二十三日ときめて例祭を行うようになったのは、昭和四十三年頃からである。御祭神は我々挺進部隊の英霊が比較にならぬほど多いのだから、かつては戦友が三百人位参列したが、よる年波いまは五十人位になってしまった。

以下私自身のこと恐縮だが挺進部

隊時代からの親友辻田信秋君（少候19期）と「辻田は川南に田中は沖繩の義烈の慰霊祭に出る」と申合わせていた。ところが平成二年辻田は物故してしまっただので、爾来私は毎年川南の例祭に出席し、町長・町の遺族会長について一文を奏上している。この度今までに奏上したものの控えを取纏めてみた。改めて公表するのも烏滸がましいが、陸軍挺進部隊の歴史を知ってもらうためにも、また我々の亡き戦友にたいす思い、それは英霊を顕彰することでもあるので、ここに書き出してみることにした。但し紙面の余裕がないので、三篇だけとする。



4年前に本殿建替



地元中学生による神楽奉納



(平成三年)

落下傘部隊の亡き戦友に捧げる言葉  
顧みれば歳月のうつろいは矢のよう  
なものであります。

昭和十九年秋、祭の太鼓の音を後に  
第二挺進団はこの地を去って行きまし  
た。目指すはレイテ決戦場、若い将兵  
の眉字には、決意が漲っておりまし  
た。西部一一八、一一九部隊の名で郷の人  
に親しまれていた挺進第三、第四の両  
部隊は、疾きこと風の如くフィリピン  
に向かいました。

「達者で暮らせ」と新婚の妻にただ一  
言、後も振り返らず発った人、残され  
た妻は詠いました。

さらばとて夫のにぎれるたくましさ  
み手のぬくもり今ものこれり

御祭神が家を出るときのお姿が目に  
浮かぶような気が致します。

力山を抜き世を蓋うほどの勇氣が  
あっても、大厦が倒れようとするとき、  
一臂で支えることは出来ぬと申します  
が、戦局の趨勢はどうすることもでき  
ず、悲惨な結末に終わりました。

私は動員計画では挺進団司令部の部  
員に内定していましたが、直前に挺進  
戦車隊長の要員ということでこの地に  
残りました。総てが運命でして、幽明  
境を異にし今日に及びました。臉に浮  
かぶ君の姿は、颯々として甞高く匂う

が如き若武者であります、それに引  
き替え私はご覧の通り老いさらばえ、  
神前に顔突いています。

茲に恭しく再拝して微衷を捧げます。

(平成十二年)

この宮に斎き祀れる挺進部隊の

英靈に奏す

日向の国のうまし郷 甞たかき をの  
こらが  
ましろきバラの花負いて 遥けき思い  
唐瀬原

神兵と世に讃えられ 日向路に

天下りせしをのこなるかも(後の人)

大みことのりかしこみて 南の空に花  
ひらき  
たちまち下すパレンバン 凱歌の陰に  
涙あり

旺んなり赤道越えて天かけり  
やまとをのこのああ晴姿(後の人)

激しきいくさよそにみて 只管練武の  
三星霜

朝日に映ゆる 日向灘 たそがれ沈む

尾鈴山  
いつ征かいつ散るのかは知らねども  
今日のつとめに我は励まん

(詠人不知)

抜山蓋世の勇あるも 時に利あらず甞  
逝かず

レイテの空やルソンの野 雄しく散れ  
り桜花  
花負いて空射ち征かむ雲染めん  
屍悔いなく我等散るなり

あらはさん時は来にけり千早ぶる  
神に仕えし太刀のほまれを

(詠人不知)

帰ることなき沖繩に 莞爾とたてり義  
烈の士

(桂善彦大尉)

祖國の山河はらからを 命と替えし  
特攻隊

奥山に名もなき花と咲きたれど  
散りてこの世に香りとどめん

(今村好美曹長)

よしや身は千々に散るとも来る春に  
また咲き出ん靖國の宮

(関 三郎軍曹)

郷土出身の御祭神に奉る  
遠つみおやの神々の 歩みたまひし日  
向路を

歎呼の声に送られて 戦の庭に立ちし  
をのこら

尾鈴ねやへたの流れの水清く  
うぶすなの人姿おもほゆ

千早ぶる護國の宮にぬかずきて  
守り給えやうらやすのくに

(詠人不知)

御祭神に捧ぐる辞

(平成十三年)

烏兔匆匆 我等共に挺進殉國の道を歩  
み 幽明を分ちしより 半世紀余を闊  
す 臉に浮かぶ御祭神は匂うが如き若  
武者なるに 神前に杖曳く我等老耄  
漫るに人生の黄昏を覚ゆ 君は護國の  
神となり 吾は現世に生き永らう 之  
我等が共に抱きし志と御祭神の遺徳を  
後世に伝うる使命ありと信じ 微力を  
竭きたれり



拝殿の横に掲揚

ここに参列する戦友も 逐年減少する  
は致し方なきことなるも 例祭は今後  
とも続けられ境内に展示せらるる絵画は  
我々亡き後世に語りかくるよすがたる  
べし  
敵國の謀略による東京裁判史観は世を  
侵蝕し我が使命遂行を妨げること甚し  
きも 我等掉尾の勇を振るいて所信に  
邁進せんとす 懺せ給え  
地元出身の御祭神に申し上ぐ 我が思  
うことは 戦友たりし御祭神に対すると  
異なるなし 郷土の人の昔変らぬ麗しき  
心情に心え 御心泰く神鎮まり給え

### 開聞岳及び高千穂峰を望んでの感懐

山中賢一

この度南九州巡拝の旅でこれらの山谷に接することが出来た。

開聞岳は薩摩半島の南端にあり標高九二二米、半島部で最高であるばかりでなく、端正な円錐形の山谷が海面から屹立しており、名山の名を恣にしてゐる。

沖繩作戦に際し南に向かう特攻機が、本土見納めとこの山を見たという。知覧特攻基地慰霊公園に次の歌を刻んだ碑がある。

帰るなき機をあやつりて征きしはや

開聞よ 母よ さらばさらばと

多くの特攻隊員を見送った開聞岳よ いまし心あらば往時の心境を語つてくれよと言いたくなる。

黒潮洗う薩南の

緑滴るこの大地

粗霊まします大八州

愛しき人よ同胞よ

双肩に負い我は征く

さらば幸あれいざさらば

北に去りゆく開聞よ

嵐に向かう我がすがた

伝えよかしと手を振りて

やまとをこの一念を

遮るものぞ何かある

いざや向はん修羅の道

人生わずか 五十年

その半ばにも満たずとも

見果てぬ夢に変わりなし

男一匹 このいのち

仇なす艦をひつ提げて

閻魔の蹠に土産せむ



“雲に聳ゆる高千穂の” それは紀元節の歌の冒頭にある故か、民族の郷愁に似た響きがある。それにも増して我々の心に迫るのは、その名が第二挺進団の通称名であることだ。

十九年十月二十日醜敵レイテに上陸するや、二十四日には挺進第三聯隊に、続いて団司令部、飛行戦隊、第四聯隊と日を措かず動員が下令された。各隊の通称名は次の通りだった。

第二挺進団 高千穂

挺進第二聯隊 香取

挺進第四聯隊 鹿島

挺進飛行第一戦隊 霧島

神の歩みし日向路に

秋の祭の夜は更けて

飛電は告ぐる捷一号

今宵名残の笛の音は

庭の山椒に鈴かけし

想いの人よわが胸は

武夫の道ふみゆかん

疾きこと風の如く去ぬ

高千穂のみおやの姿

偲ばるる

レイテに降りし

神のつわもの

あれから半世紀もすぎた。嘗て新田原で西の天際に望んだ山。思いはめぐる、高千穂の名を負つて勇躍去って行った人達よ。



# 沖繩特攻慰靈行案内

## 序

日本列島最南端沖繩の島々を護るため、軍官民合せて約一七万人が国に殉じた。英霊の国に報ゆるの情に甲乙はないが、特攻隊員にその最たるものを見る。沖繩作戦に散華した特攻隊員は、海軍航空一一一四柱、陸軍航空九一七柱、空挺一一三柱、震洋一九〇柱、②二六三柱と記録されている。各特攻隊縁の個所に於いて御霊を追悼すると共に、殉国特攻隊員に対する我々の情念を深め、かつ後世に語り伝える資を得ようとするものである。

姫百合の塔及び健児の塔

戦没学徒追悼

摩文仁戦跡公園

特攻関係は「特攻之碑」(飛行第十九戦隊)、「義烈」

## 日程

5月21日〜24日 三泊四日

## 費用

羽田発着で十万円前後

## 申込み

同封申込書で3月15日まで

## その他

巡拝の途中に一般観光(首里城・玉泉洞・東南植物園等)を交えます  
細部行動計画決定次第申込者にお知らせします

## 巡拝個所予定

陸上自衛隊那覇駐屯地

広報班で沖繩作戦全般の説明を聞く

沖繩県護国神社

小禄海軍壕

波之上神社

洋上に散華した航空特攻を追悼

洋上慰靈祭

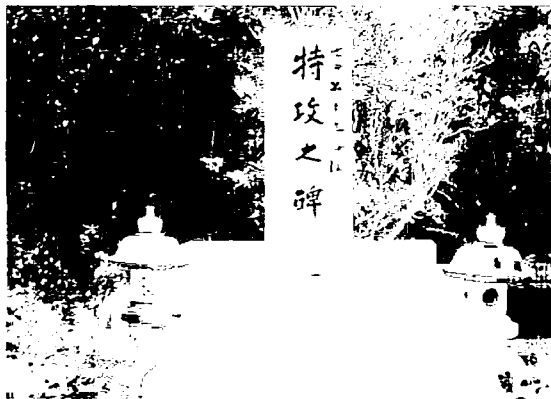
慶良間列島の船上にて

読谷飛行場跡

義烈空挺隊及び誠第32飛行隊を追悼

金武町金武鎮魂碑

水上特攻追悼



摩文仁丘上 19F



読谷 義烈



水上特攻

